

日本語語学研修プログラム報告書

(第11回～第20回)



1. はじめに	1
2. 各回の報告	3
第11回	4
第12～14回	7
第15回・第16回	15
第17回・第18回	21
第19回	26
第20回	29
3. 研修実施に係るデータ	32
3-1. 実施時期および期間	32
3-2. 参加学生	32
3-3. 担当教職員	33
3-4. 学外実習	34
3-5. 体験学習	34
3-6. ホストファミリー	35
3-7. Buddies	35
4. ホストファミリーからのメッセージ	36
5. 元研修生からのメッセージ	38
6. Buddies からのメッセージ	44
7. 写真で振り返る各回の取り組み	45
8. 終わりに	50

目 次

1. はじめに	1
2. 各回の報告	3
第11回	4
第12～14回	7
第15回・第16回	15
第17回・第18回	21
第19回	26
第20回	29
3. 研修実施に係るデータ	32
3-1. 実施時期および期間	32
3-2. 参加学生	32
3-3. 担当教職員	33
3-4. 学外実習	34
3-5. 体験学習	34
3-6. ホストファミリー	35
3-7. Buddies	35
4. ホストファミリーからのメッセージ	36
5. 元研修生からのメッセージ	38
6. Buddies からのメッセージ	44
7. 写真で振り返る各回の取り組み	45
8. 終わりに	50

1. はじめに

この度、香川大学、日本語語学研修プログラムの取組みに関して、一言ご挨拶を申し上げます。平成17（2005）年夏から平成26（2014）年夏まで、年に2回、合計20回を無事に実施することができました。このプログラムの対象者は、本学の海外協定大学からの学生であって、他に、協定外の大学からの学生もありました。参加してきた研修生の人数は、219名でした。平均として、1回におよそ11名としますが、参加者の一番多かったのは22名で、一番人数の少なかったのは5名でした。性別からみると、女子は166名（75%）、男子は53名（25%）でした。国籍別を見ると、韓国からの研修生は89名、台湾からは90名、それから中国からは40名でした。学年別は、1年生は32名、2年生は79名、3年生は58名、4年生は49名、大学院生は1となっていました。専攻別のデータを見ると、102名は日本語専攻で、117名はその他の専攻でした。

この機会に、協力をして下さった地域の方々に改めて心より、御礼を申し上げたいと考えています。我々大学のスタッフの力だけでは、当然ながら、実施出来なかったと思います。まず、ホストファミリーの方々には、研修生たちに暖かい関わり方をして頂いて、大変、お世話になりました。20回のプログラムで、協力して下さったホストファミリーの延べ家庭数は、164でした。毎回、研修生たちはホストファミリーとの対面はとても楽しみにしながら、緊張していた場面は印象的でした。それから、ステイの後、教室に戻ってきた際、ホストファミリーと過ごした時間を興奮しながら仲間たちに伝えていた風景は、忘れることはないでしょう。

ホストファミリーとの関わりの他、本学の学生との交流も重要な一角でありました。この交流の仕組みは、我々は「バディーズ制度」と呼んで、在学中の人学生たちが「バディーズ」になって、同世代の研修生たちと交流しました。ほとんどのバディーズは日本人学生でしたが、留学生がなってくれた時もありました。

工場見学に関しては、ほとんどうどん関係のものでしたが、研修生たちはおそらく一番楽しく学習できたのは、うどん作りの実習だと思います。また、観光名所や文化施設、企業や研究所等での学習も多々させて頂きました。丁寧にご案内や説明などをして下さった組織や方々に御礼を申し上げます。

文化体験学習の部分は、茶道や華道の他に、書道、盆踊り、着物や浴衣の着付け、香川漆器をやりました。茶道や書道の指導は、本学の学生のサークルの部員がして下さいました。華道は同じくサークルの部員にして頂いた時もあり、地域のボランティア団体の方に指導をして頂いた時もありました。盆踊りや着物や浴衣の着付け、香川漆器の指導は、地域のボランティア団体から指導を頂いて実施しました。

プログラムの大きな部分は、もちろん、教室内の授業でした。同僚の先生方やスタッフの皆さんの尽力で、この部分も円滑に実施できて、お礼を申し上げたいと思います。

プログラムの実施は、全ての取り組みが順調あるいは成功に終わったわけではもちろんありませんでした。ちょっと「あれ？」という場面もありました。多少のアクシデントもありました。ホストファミリーの組み合わせも時々ずれが生じました。でも、学内外の皆様のお陰で、大きな「失敗」はありませんでした。これらの貴重な経験は忘れずに、それに加えて、培ってきた「ノーハウ」を次のステップ（下記、「さぬきプログラム」）で生かして参りたいと考えております。

最後に、時代の移り変わりに従って、我々が運営する業務も変わって行きます。大学もゆっくりではありますが、「成長」して行きます。その「成長」というと、留学生の受け入れは一つの重要なパートであります。本プログラムは、その「成長」の過程の一つであり、今後、別の形で、留学生たちの受け入れをすることにして行きます。具体的に申しますと、本学のカリキュラムに組み込まれていない、短期語学研修をやめて、長期（少なくとも、1学期）の受け入れに展開して行きます。このプログラムは、我々は「さぬきプログラム」といいます。これからも、皆様にご理解やご協力を頂けたら、幸いです。ありがとうございました。

平成27（2015）年3月

インターナショナルオフィス副オフィス長、留学生センター長 ロン・リム

2. 各回の報告

第11回から第19回までの報告は、『香川大学インターナショナルオフィス年報』創刊号から第5号までの各号に掲載のものを、再録する。

第20回については、『年報』での報告はまだ行っていないため、本紙上で新たに報告を行う。(次年度発行の『年報』第6号に掲載予定。)

第11回から第19回までの報告の出典は、以下のとおりである。

- ・ 第11回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』創刊号 (2009年度)
(平成23年3月発行) 46～49ページ
- ・ 第12回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第2号 (2010年度)
(平成24年3月発行) 41～43ページ
- ・ 第13回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第2号 (2010年度)
(平成24年3月発行) 43～45ページ
- ・ 第14回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第2号 (2010年度)
(平成24年3月発行) 45～48ページ
- ・ 第15回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第3号 (2011年度)
(平成25年3月発行) 32～34ページ
- ・ 第16回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第3号 (2011年度)
(平成25年3月発行) 35～37ページ
- ・ 第17回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第4号 (2012年度)
(平成26年3月発行) 32～34ページ
- ・ 第18回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第4号 (2012年度)
(平成26年3月発行) 34～36ページ
- ・ 第19回…『香川大学インターナショナルオフィス年報』第5号 (2013年度)
(平成27年3月発行予定) 印刷中

なお、第1回から第10回までの記録については、『香川大学留学生センター 日本語語学研修プログラム報告書 (第1回～第10回)』として平成23年3月に発行済みである。

第11回日本語語学研修プログラム報告

塩 井 実 香

1. 研修の目的

従来どおり、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介するとともに、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として行った。また、この研修をきっかけに、本学へ正規留学してくれることを願う呼び水効果の意図も、これまでと変わらない。

2. 研修生

定員を15名と定めて募集し、14名の参加を得た。内訳は、中国より2名（いずれも北京工業大学より）、韓国より9名（建国大学1名、真理大学3名、ハンバット大学5名）、台湾より3名（いずれも輔仁大学より）で、全員女性であった。

本研修に中国から参加があったのは、前回第10回の北京工業大学からの1名が初めてであったが、今回は同大より2度目の中国人学生の参加となった。前回の1名が本研修に満足して帰国したことの効果とも考えられる。

なお、本研修は、複数の国・地域・大学から学生を受け入れて交流を図るハブ的役割を目指すため、1大学からの参加は3名以内と定めている。ただ今回は、期日までの応募者が15名を満たさなかったこと、ハンバット大学側からの強い要望があったことにより、後日同大より追加応募を受け付けたため、結果的に同大のみ1大学から5名の参加となった。

3. 研修期間

平成22（2010）年1月25日（月）から2月5日（金）までの2週間を設定した。冬季研修では、参加国・地域の事情を考慮し、例年、極力旧正月に重ならないよう設定するが、今回は、本学側の学年暦等との関係で、旧正月と重ねざるを得なくなったことは残念であった。（そのおかげで、前述のとおり、ハンバット大学からの3名以上の受け入れ希望をかなえることはできたが。）

4. 研修日程と時間割

以下の日程で行った。

月 日	時 間	事 項
1月25日 (月)	10:00~10:30 10:30~ 13:00~13:50 14:00~14:50 17:30~	受付（生涯学習教育研究センター第2講義室） 開講式及びガイダンス（生涯学習教育研究センター第2講義室） 総合 担当：高水（生涯学習教育研究センター第2講義室） 総合 担当：高水（生涯学習教育研究センター第2講義室） 情報交換会（大学生協1階）
1月26日 (火)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~	日本事情 担当：ロン（生涯学習教育研究センター第2講義室） 日本事情 担当：ロン（生涯学習教育研究センター第2講義室） 学外実習 『栗林公園』

1月26日	(火)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~	日本事情 担当:ロン (生涯学習教育研究センター第2講義室) 日本事情 担当:ロン (生涯学習教育研究センター第2講義室) 学外実習 『栗林公園』
1月27日	(水)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~	会話 担当:高水 (生涯学習教育研究センター第2講義室) 会話 担当:高水 (生涯学習教育研究センター第2講義室) 体験学習 『茶道』(香川大学表千家茶道会)(幸町会館)
1月28日	(木)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~13:50 14:00~14:50	聴解 担当:大野呂 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 聴解 担当:大野呂 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 読解 担当:塩井 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 読解 担当:塩井 (生涯学習教育研究センター第1講義室)
1月29日	(金)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~13:50 14:00~14:50 15:00以降	日本事情 担当:正楽 (生涯学習教育研究センター第3講義室) 日本事情 担当:正楽 (生涯学習教育研究センター第3講義室) 会話 担当:塩井 (研究交流棟5階研究者交流スペース) 会話 担当:塩井 (研究交流棟5階研究者交流スペース) ホストファミリーとの対面式 (生涯学習教育研究センター第2講義室)
1月30日	(土)	終日	ホームステイ
1月31日	(日)	終日	ホームステイ
2月1日	(月)	16:00まで	ホームステイ
2月2日	(火)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~15:00	日本事情 担当:ロン (生涯学習教育研究センター第2講義室) 日本事情 担当:ロン (生涯学習教育研究センター第2講義室) 学外実習 『四国村』
2月3日	(水)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~15:00	作文 担当:高水 (生涯学習教育研究センター第2講義室) 作文 担当:高水 (生涯学習教育研究センター第2講義室) 体験学習 『華道(明石先生)』(生涯学習教育研究センター第2講義室)
2月4日	(木)	10:00~10:50 11:00~11:50 13:00~13:50 14:00~14:50	聴解 担当:大野呂 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 聴解 担当:大野呂 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 作文 担当:塩井 (生涯学習教育研究センター第1講義室) 作文 担当:塩井 (生涯学習教育研究センター第1講義室)
2月5日	(金)	10:00~10:50 11:00~11:50 16:30~17:30 17:30~18:00 18:00~19:30	総合 担当:正楽 (生涯学習教育研究センター第3講義室) 総合 担当:正楽 (生涯学習教育研究センター第3講義室) 研修体験レポート発表会 (研究交流棟5階) 修了式(修了証書授与)(研究交流棟5階) 意見交換・反省会(大学会館2階 第1集会室)

5. 授業・学外実習・体験学習

授業科目の設定は従来どおりである。ただ、ホームステイ前の「日本事情」クラスでは、円滑なホームステイ実施のため、日本の家庭生活についての説明や、ステイに係る注意点の周知の徹底を図った。

学外実習では、研修期間が2週間と限られていることから、従来行った先の中から「栗林公園」

と「四国村」の2か所に絞って行くこととした。

体験学習の内容も、従来から変更はないが、「茶道」に関しては、本学に茶道サークルが3つ（表千家、裏千家、石州流）あることから、本学学生の国際交流の機会を広げる意味でも、前回とは異なる流派の「表千家」に依頼することとした。

6. その他

毎回研修生に評価の高いのがホームステイであるが、ご登録くださっているボランティア家庭の中から、各回の学生数に応じたご家庭を確保するのはなかなか難しい。特に今回は、都合の合うご家庭が少なかったため、新たに2家庭、直前にお声かけし、ご登録いただき、ご協力を願うこととなった。また、それでも、研修生14名に対し10家庭しかご都合が合わなかったため、基本的には1家庭に1名受け入れていただいているところを、新規1家庭を含む4家庭に、2名ずつ受け入れていただくこととした。

研修生の定員を15名に定めているのは、幸町会館の宿泊可能数によるものだが、今回の反省事項として、今後はホストファミリーの確保も考慮し、定員を削減することも検討することとした。

7. 今後に向けて

研修生募集の際、「日本語能力試験3級相当以上」を条件とし、申込時に本人および担当教員等による日本語力の自己申告もしてもらうのだが、それでもやはり、今回も、3級に満たない学生も参加していた。書面による事前の自己申告の難しさを痛感する。渡日後日本語が通じない本人たちが一番大変だろうが、授業を行う教師も、周りの研修生も、交流をしてくれる ICES 等の日本人学生も、それぞれに苦勞することとなる。そして、最も影響を被るのが、日本語力の不十分な学生を受け入れてくださるホストファミリーの皆様である。今回も、新規のご家庭を含め、ステイ中の意思疎通に苦勞をおかけした家庭がいくつかあったことは、大変申し訳ない。せっかくのホームステイが、学生・ホストファミリー双方にとって満足いかないものとなるのは、我々教職員としても非常に心苦しく残念である。受け入れ学生の日本語力の事前把握は、今後の大きな課題の一つである。

とはいえ、今回は、珍しく研修生全員が女性ということもあってか、学生同士は日を追うごとに打ち解け、非常に仲良くなっていた。特に、中国と台湾の学生が、当初は先入観もあったようだが、互いに交流し意見交換する中でわだかまりが取れ、お互い知り合えたことを非常に感謝しながら帰国の途についたのは、2週間見てきた我々としても、予想以上の嬉しさがあった。本研修が、我々の意図した以上のハブ的役割を果たせていたのではないかと思う。

本研修も二桁を数えるまでに実績を重ねていくことができ、毎回反省をもとに改善を試みている。今回は、本学教職員の負担軽減と、ある程度の日本語ができるはずの研修生の勉強も兼ねて、渡日時の本学教職員による出迎えをしないこととした。渡日直後の学生とタクシー運転手とのやりとり等、ごく一部を除いては概ね問題なかったようなので、今後もこのやり方を継続する予定である。

平成21（2009）年4月より新たにインターナショナルオフィスができ、留学生センターはその中に位置づけられることとなった。このことと、本研修が二桁を数えるまでになったことから、一つの区切りとして、第10回研修までを総括する報告書を作成することとなった。これを一つの節目として、次年度からもよりよい研修を目指して、教職員一丸となって取り組んでいきたい。

第12～14回日本語語学研修プログラム報告

塩井実香

1. 「日本語語学研修プログラム」の目的

本プログラムは、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介するとともに、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として平成17（2005）年より行っているものである。併せて、本研修への参加が、その後の本学への正規留学につながるようという、言わば呼び水効果の意図もある。

例年は、年2回、夏季と冬季に実施することがほとんどであったが、平成22（2010）年度には計3回のプログラムを実施した。以下、それぞれのプログラムについて記す。

2. 第12回日本語語学研修プログラム

2-1. 研修生

台湾より2名、韓国より5名、計7名の参加があった。内訳は、輔仁大学2名（台湾）、建国大学3名、韓国海洋大学3名、ハンバット大学5名（以上、韓国）である。7名中、日本語専攻の学生は2名のみで、あとは経済・経営工学・電子工学・海事法などであった。

2-2. 研修期間

平成22（2010）年6月28日(月)から7月9日(金)の2週間。

2-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

授業・体験学習はいずれも、午前は10:00～11:50、午後は13:00～14:50である。（授業の場合は50分単位で10分休憩をはさみ、体験学習・学外実習もこの時間設定に準ずる。なお、本プログラム開始当初は1時間を90分に設定していたが、台湾・韓国の大学では50分授業が一般的であることから、本プログラムでも50分授業に設定し直した。）

6 / 28(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：高水) 17:30～：情報交換会	6 / 30(水)	午前：授業「会話」(担当：塩井) 午後：授業「読解」(担当：正楽)
6 / 29(火)	午前：授業「聴解」 (担当：大野呂) 午後：体験学習「華道」(講師：明石、 担当：塩井)	7 / 1(木)	午前：授業「日本事情」(担当： ロン) 午後：学外実習「栗林公園」 (担当：高水)

7 / 2 (金)	午前：授業「日本事情」(担当：正楽) 午後：授業「会話」(担当：塩井) 16：00～：ホストファミリーとの対面式、ホームステイ	7 / 6 (火)	午前：授業「聴解」(担当：大野呂) 午後：体験学習「盆踊り」(講師：明石、担当：ロン)
7 / 3 (土)	終日：ホームステイ	7 / 7 (水)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：体験学習「茶道」(講師：石州流茶道部)
7 / 4 (日)	終日：ホームステイ ※小豆島日帰り旅行(自由参加)	7 / 8 (木)	午前：授業「作文」(担当：高水) 午後：学外実習「四国村」(担当：細田)
7 / 5 (月)	16：00まで：ホームステイ	7 / 9 (金)	午前：授業「総合」(担当：ロン) 16：30～：研修体験発表会 17：30～：修了式 18：00～19：30：意見交換・反省会

2-4. 授業・体験学習・学外実習

授業科目の設定は従来どおりである。前回第11回から始めたように、ホームステイ前の「日本事情」クラスでは、円滑なホームステイ実施のため、日本の家庭生活についての説明や、ステイに係る注意点の周知の徹底を図った。

体験学習・学外実習について。これまでは、その時々で都合の合う専任教員が引率し、また、教員だけでなく国際グループ(旧：留学生グループ)職員も同行していたが、第12回より引率担当の専任教員を事前に決めておき、国際グループ職員のサポートが必要な時は基本的に担当教員1名が引率する形とした。

体験学習では、今回初めて「盆踊り」を取り入れてみた。これは、時期的に地域の夏祭りが近いこと、香川での研修であるため、地元香川の文化を知ってもらうのもよいのではないかと考えたことによる。併せて、時期および体験内容を鑑み、講師の方のご厚意により、研修生全員が浴衣を着て行うこととし、浴衣の貸与および着付けのご協力も得た。

茶道は、本学に表千家・裏千家・石州流の三つの流派の部があり、第7回以降第11回までは各部の都合もあり表千家(4回)、裏千家(1回)に講師として協力してもらっていたが、今回第12回では初めて石州流に協力してもらえることとなり、石州流の作法を学んだ。

華道も、従来どおり本学華道部に講師として指導してもらった。茶道も華道も、日本の伝統文化を学ぶだけでなく、同世代の学生同士が交流することにも意義があると思われる。

学外実習では、前回第11回同様、「栗林公園」と「四国村」の2か所に行った。

2-5. その他

初日の情報交換会を、従来どおり17:30開始としていたが、本学の5コマ目授業は17:50までであり、5コマ目に授業のある本学学生（研修生のサポートをしてくれる、「アイセス（ICES: Intercultural-Exchange Society 香川大学異文化交流会）」部員）の参加が難しいという問題がある。せっかく研修生を歓迎するための会であるのに、歓迎する側の参加が少ないのは寂しいことであり、開始時刻については今後の検討課題である。

1週目金曜日のホストファミリー対面式を、これまでは15:00からとしていたが、平日で仕事等のあるご家庭も多いこと、対面時間に幅があると、ホストファミリーを待つ側の研修生も、仲間を見送った後、長く待たなければいけない学生が出てくると、そして、我々対応する側の教職員も時間的に拘束されること等から、今回より対面式は16:00からとすることにした。今後も16:00開始のほうがよいように思われる。

2-6. 第12回プログラムを振り返って

前回第11回より、研修生渡日時の本学教職員による高松駅等への送迎をしないこととし、研修生には事前に本学および宿泊施設（幸町会館）の場所を知らせ、各自で本学まで来るようにさせた。これは、本学教職員の負担軽減のためのみならず、一定以上の日本語力を有する研修生にとって、公共交通機関での移動等、教室活動以外の経験も全て日本語や日本文化の学習になるからということによる。今回第12回もこの方針で実施したが、特段の問題は生じなかったことから、今後もこの出迎えなしの方針は続ける見込みである。

研修生の大きな楽しみの一つであり、実際好評を得てきているホームステイについては、毎回登録済みのホストファミリーの中から日程の都合の合うご家庭を確保・依頼するのがなかなか大変ではあったが、今回は研修生が7名と、本研修において過去2番目に少ない数であったため、ホストファミリーとのマッチングには特に苦労はなかった。

研修の効果や、我々の目指すハブ的交流、すなわち、複数の国・地域の複数の大学からの参加を得て、本学学生も含めた相互国際交流を行うという点から、1回のプログラムにおける参加学生数があまりにも少ないのは好ましくないと思われる。宿泊施設（幸町会館）の部屋数や、ホストファミリーとのマッチングのことを考慮すると、1回あたりの参加学生数は10名程度が望ましいのではないかと思われる。

プログラム全体に関しては、ありがたいことに今回も研修生全員が満足感を持ってくれたようである。研修生による修了作文を見ると、「日本語をもっと熱心にして来たらもっとよかったのに。」「将来もう一度日本に来る機会のために、これからも一生懸命頑張りたい。」「日本語で留学したくなった。韓国へ帰れば、もっと熱心に勉強して日本に行きたい。」（以上、原文のまま）等、研修前の日本語学習不足を反省したり、研修終了後の日本語学習のモチベーションが上がったり、再渡日や日本留学への意欲が高まったり、といった様子が見られる。2週間という短期間ではあるが、国で習った日本語を実際に使って日本人や他の日本語学習者と交流したり、身をもって日本の生活、日本の文化を体験したりしたことが、よりいっそう日本や日本語を知りたいという意欲につながり、再度の渡日や留学につながるなら、我々としても本研修の意図が果たせることとなり、嬉しいこと

である。また、このような学生たちによって、母国の友人や後輩が同様に日本語や日本への興味・関心を高め、新たな研修参加者あるいは留学生として本学に来てくれれば、これも我々にとっては嬉しい効果となろう。そうなるような魅力的なプログラム作りを目指し、今後も反省や改善を重ねていきたい。

3. 第13回日本語語学研修プログラム

3-1. 研修生

前述の第12回と次節で述べる第14回とは、本学交流協定校を中心に募集をかけ、毎年定期的に行っている、我々関係教員が“定期便”と呼ぶところのプログラムだが、この第13回は、我々の言う“臨時便”であり、特定の大学からの要請により個別に臨時に行ったプログラムである。

第13回プログラムは、交流協定校である中国の河北医科大学からの要請により、同大学医学部生15名を対象に行った。

なお、いわゆる“臨時便”の実施は過去にも1回ある。平成18（2006）年8月に実施した第4回プログラムがそうで、この時も河北医科大学からの要請を受け、同大生22名を対象に実施した。第4回の研修生は、ほとんどが日本語学習経験がなく、限られた時間内での日本語授業やさよならパーティー（現在で言う最終日の「意見交換・反省会」）での地域の国際交流関係者との交流がかなり難しかったことから、今回は、多少とも事前に日本語の基礎を学んでくるよう、先方に要望していた。結果、今回は、授業時に書かせた自己紹介シートに、程度の差はあれ、15名中13名が日本語での記載をしていた。

3-2. 研修期間

通常日本語語学研修プログラムは基本的に2週間だが、今回は河北医科大側の都合もあり、平成22（2010）年7月27日(火)から7月30日(金)の4日間実施した。（ちなみに、先に述べた同大生対象の第4回プログラムは5日間であった。）

3-3. 研修日程・研修内容

通常研修のように週末もはさまず、平日のみの4日間ということで、ホームステイはもちろん、体験学習も行っていない。授業、学外実習1回、そして本学医学部の見学および医学部生との懇親会という内容であった。

研修日程と内容は以下のとおりである。なお、授業は通常研修と同じく50分授業とし、10分の休憩をはさむ。午前の授業は10：00～11：50、午後の授業は13：00～14：50で、学外実習もこれに準じる。

7 / 27(火)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業（担当：高水） 17：30～：情報交換会	7 / 29(木)	午前：学外実習「栗林公園」 （担当：正楽） 午後：授業（担当：塩井）
7 / 28(水)	午前：授業（担当：塩井） 午後：医学部見学および懇親会 （13：30～16：00）（担当：ロン）	7 / 30(金)	午前：授業（担当：高水） 午後：修了式（16：30～17：00）、意見 交換・反省会（17：00～18：30）

3-4. 授業・学外実習

授業は、通常のプログラムにおいては、読み・書き・聞き・話すの4技能の養成を意識し、また、日本文化や日本事情を教える等するために、「総合」「読解」「聴解」「会話」「作文」「日本事情」という6つの授業を設定しているが、第13回では、授業数も少なく、また、日本語学習経験のない学生が大部分（多少の学習歴がある学生は少数派）であるため、特に技能別に分けることはせず、「日本事情」も設けず、4日間（各日50分×2コマ）通して日本の文字や基本的な語彙・会話を学ぶ入門向け授業を実施した。この授業は、専任教員のうち日本語教育専門の高水・塩井が担当し、学外実習と医学部見学をそれぞれ正楽・ロンが担当することとした。

授業では、絵カード・プリント等、日本語の基礎の理解を視覚的に助ける教材を使いながら、ひらがな・カタカナを確認しつつ、日常の基本的な挨拶表現や簡単な会話を学習した。また、医学部生である研修生たちにとって身近で興味を持てるであろうものとして、体の部位を表す日本語も学習した。

学外実習は1回だけ行うこととし、栗林公園を訪問した。

ちなみに、第4回では、河北医科大側からの要望により、急遽授業を1回とりやめ、その時間を市内観光に充てるということもあったが、今回は、あくまでこれは「日本語語学研修」であるという我々の立場を貫き、我々の組んだプログラムに従って授業を受け、学外実習に参加してもらうようにした。

3-5. 第13回プログラムを振り返って

4日間という、これまでで最短の研修ではあったが、初日の情報交換会（ウェルカムパーティー）では幸町の本学学生との交流もできたし、渡日前に多少の日本語学習をしてきてくれたことから、日本語授業もそれなりに中身のあるものができたし、栗林公園見学も楽しんでもらえたようだし、医学部での見学や交流も、さまざまな内容が用意され、多くの医学部教員や本学医学部生が参加し、充実したものになったようであるので、短期間のわりには充実したプログラムになったのではないかと思う。

不定期に、臨時に行うプログラムというのは、我々関係教職員にとっては負担が増えることにもなるが、こちらから募集をかけ参加を募る通常の定期的なプログラムとは違い、自分たち向けのプログラムを組んでほしいという要望に基づいて実施ができるのは、ある意味では非常に喜ばしいことである。

今回は全員が医学部生ということで、日本語・日本文化体験だけでなく、あるいはそれ以上に医学部での学びが渡日の目的であったのかもしれない。ともあれ、協定校との交流を深める意味でも、先方のニーズに応じた研修プログラムを関係部局で協力して作り上げ、本学にとっても先方にとってもプラスとなるような研修が行えるのが望ましい。今後もこのような臨時研修の要望が来た場合は、これまで2回の受け入れ経験をふまえ、可能な範囲で実施していければと考えている。

4. 第14回日本語語学研修プログラム

4-1. 研修生

台湾の輔仁大学より6名、韓国の韓国海洋大学より6名、計12名が参加した。輔仁大生は全員が日本語専攻、海洋大生は全員が日本語以外の専攻であった。

輔仁大学は本学の協定校ではないが、台湾での JASSO 留学フェア参加をきっかけに同大日本語教員とのつながりができて以降、第9回から今回まで毎回（前述の河北医科大生対象の第13回を除く）、同大より複数名の学生が参加してくれているのは嬉しい限りである。

4-2. 研修期間

平成23（2011）年1月17日(月)から1月28日(金)の2週間。

本プログラムの主な参加学生は台湾および韓国の出身者であるため、例年そうであるが、冬季プログラムの実施時期は、旧暦の正月に重ならないよう、配慮している。また、本学学生との交流の場が持てるよう、本学の期末試験時期とも重ねない配慮も必要である。

4-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

1 / 17(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：高水) 17：30～：情報交換会	1 / 23(日)	終日：ホームステイ
1 / 18(火)	午前：授業「日本事情」(担当：ロン) 午後：学外実習「栗林公園」(担当：正楽)	1 / 24(月)	16：00まで：ホームステイ
1 / 19(水)	午前：授業「聴解」(担当：大野呂) 午後：体験学習「茶道」 (講師：表千家茶道部、 担当：正楽)	1 / 25(火)	午前：授業「日本事情」(担当：ロン) 午後：学外実習「四国村」(担当：高水)
1 / 20(木)	午前：授業「日本事情」(担当：正楽) 午後：体験学習「華道」(講師：明石、担当：塩井)	1 / 26(水)	午前：授業「作文」(担当：大野呂) 午後：体験学習「書道」(講師：書道部、担当：ロン)
1 / 21(金)	午前：授業「会話」(担当：塩井) 午後：授業「読解」(担当：高水) 16：00～：ホストファミリーとの対面式、ホームステイ	1 / 27(木)	午前：授業「日本事情」(担当：正楽) 午後：授業「作文」(担当：高水※) (※当初予定では塩井だったが、都合により交代。)
1 / 22(土)	終日：ホームステイ	1 / 28(金)	午前：授業「総合」(担当：高水) 16：30～：研修体験発表会 17：30～：修了式 18：00～19：30：意見交換・反省会

4-4. 授業・体験学習・学外実習

授業科目の設定は従来どおりである。

2週目に、最終日の体験発表と修了作文集作成のため、「作文」授業を2回（(50分×2コマ)×2日）とっている。従来はこの作文授業を、日本語教育専門の専任教員が担当していたが、今回は、他の用事等の関係で、初めて1回（1日）分を非常勤講師に依頼した。本学の日本語非常勤講師は香川県外在住者が多いこともあり、作文添削の手間や作文担当教員間の引き継ぎ等を考慮すると、非常勤講師に作文授業を依頼するのは難しいこともあるのではと懸念されたが、実際に行ってみたら、それほど大きな問題も生じなかったように思う。

体験学習の茶道は、本学に三つある茶道部（表千家・裏千家・石州流）のうち、今回は裏千家茶道部に講師を引き受けてもらい、裏千家の作法を学んだ。

華道も、従来どおり本学華道部に講師として指導してもらった。茶道も華道も、日本の伝統文化を学ぶだけでなく、同世代の学生同士が交流することにも意義があると思われる。

学外実習では、前回第11・12回同様、「栗林公園」と「四国村」の2か所に行った。この2か所は、毎回研修生から好評である。いずれも外での見学となるため、冬季の場合寒さも気になるところだが、香川県は雪も少ないし、仮に雪が降ったとしても、それはそれで特に台湾の学生には珍しく、喜ばれるため、このところ学外実習はこの2か所でほぼかたまりつつある。

4-5. その他

先に、第12回プログラムの項で「2-5. その他」として記した初日の情報交換会を開始時刻について、第14回より30分遅らせ、18:00開始とした。これにより、5コマ目17:50まで授業のある本学学生も会の初めから参加できることとなり、問題点が一つ解決したことになる。

今回記録しておくべきこととして、当該学生にも他の研修生にも、そして我々教職員にとっても非常に残念なことであったが、台湾からの1名の研修生が、ホームステイ中の不慮の事故による怪我で、研修半ばにして急遽帰国せざるを得なくなるということがあった。これは、災害や交通事故等ではなく、ホストファミリーとのスポーツを通じた交流の中での怪我であり、双方の不注意いものではないので仕方がないが、当該の受け入れ家族（特にその小さいお子さん）が非常にショックを受けていたと聞いた。この一件は、我々にとっても危機管理の見直しという大きな課題になったが、とにかく、当該学生が、本学や本プログラムやホストファミリーに対して良くない印象を抱くこともなく無事に帰国の途につき、母国で治療ができたことは、不幸中の幸いというか、関係各者にとってある種の社会勉強、社会経験になったような気がする。

もう1点挙げるとすれば、これは今回に限ったことではないが、研修生の日本語力の問題もあろう。応募の際に、最低限、日本語能力試験3級（2010年からの新試験ではN4）かそれ相当以上の日本語力があることを条件として課しており、受験実績がない場合は、所属大学の日本語教員に、3級（N4）相当以上である旨のサインをもらうようにしている。しかし、書類上は条件を満たしているにもかかわらず、実際に渡日した学生を見ると、本当にそのレベルの日本語力があるのか疑問に思わざるを得ない学生がいることがあるのも、残念ながら事実である。

そして、今回第14回でも、そのような学生が2名ほどいた。我々は、授業の実施や体験学習・学

外実習での説明・指示の徹底、日本人学生との交流、ホストファミリーとの交流等の各場面において、ある程度の日本語力があることを前提に本プログラムを計画・実施している。したがって、研修生が所定の日本語力を備えていなければ、これら各場面、とりわけ、ホストファミリーとの意思疎通および修了作文作成・修了体験発表の際に苦労することとなる。

応募書類の記載内容と書類上の自己申告のみで応募学生の日本語力を判断するのはなかなか難しいことではあるが、派遣元大学の窓口教員や日本語教員とのコンタクトを密にするなどして、可能な限り条件にかなう日本語力を有する学生に応募してもらうよう、我々受け入れ側としても働きかけの努力が必要かと思われる。

4-6. 第14回プログラムを振り返って

報告者（塩井）が急用で最後2日の日程に参加できなかったため、全日程をきちんと把握できているわけではないが、関係教職員の話等をふまえると、やむを得ない途中帰国者1名がいたことを除いては、概ね問題なく終了できたように思われる。

今回の研修生の修了作文を見ていて気付くのは、「日本で、台湾の学生と韓国の学生が出会い、交流し、友達となった」ことの楽しさや意義について書いていた学生が多かったということである。このような感想は、多かれ少なかれ毎回研修生から聞かれるものであるが、特に今回はそのことを印象深く感じている学生が多かったように思われる。今回は、台湾と韓国よりそれぞれ1大学6名ずつの参加であり、特に台湾のほうは全員が同じ日本語学科3年生ということで、渡日前からお互いよく知っている顔ぶれだったと思われるが、日本へ来て、日本人のみならず他の国からの学生とも知り合え、学習中の日本語を使って交流を深めることができたのは、研修生にとって大きなことだったのであろう。本研修を通し、複数の国・大学からの学生が相互に交流できるハブ的交流を目指す我々にとっても、嬉しいことである。

もう1点、修了作文を読んで印象に残った点がある。それは、前年にクラスメートが本研修に参加したという台湾人学生が、そのクラスメートと自分とが同じ家庭でホームステイしたことについて書いていたくだりである。「私と去年香川大学に来たクラスメートの〇〇〇は同じホームステイして、共に〇〇さんの娘になりました。こんな偶然があるなんて、驚きました。」（原文のまま）とあった。研修最終日にホストファミリーから「また海外に娘が増えました」といった喜びの声を聞くことがあるが、同じ大学からコンスタントに参加してもらっていると、口コミで本研修に関心を持つ学生も増えるし、今回のように、同じご家庭に泊まり、同じご夫婦が日本でのお父さん・お母さんになるという事例も出てくるのだろう。今回台湾からの派遣元である輔仁大学は、本学とは交流協定関係にないが、今後も継続的に受け入れをし、本学や地域の方々等、香川県との縁を強くしていけたらと願っている。もちろん、他の国・他の大学においても、このようなつながりが今後増えてくれば、受け入れ側としても嬉しい限りである。

第15回・第16回日本語語学研修プログラム報告

塩井実香

1. 「日本語語学研修プログラム」の目的

本プログラムは、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に川の歴史や文化を紹介するとともに、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として平成17（2005）年より行っているものである。併せて、本研修への参加が、その後の本学への正規留学につながるようにという、言わば呼び水効果の意図もある。

平成23（2011）年度には、例年どおり夏季と冬季の2回実施した。以下、それぞれのプログラムについて記す。

2. 第15回日本語語学研修プログラム

2-1. 研修生

昨年度までは定員を15名としていたが、東日本大震災の影響で本学の宿泊施設「幸町会館」も震災関係者用に2部屋開けておかなければならなくなったため、今回から定員を10名に減らした。これには、15名分のホストファミリーを探すのが大変だということも関わっている。

参加者を募集した結果、台湾より8名、韓国より4名、計12名の応募があり、定員を2名上回るものの、全員受け入れることとした。内訳は、真理大学1名（台湾）、輔仁大学7名（台湾）、韓国海洋大学4名（韓国）である。本プログラムは、複数国／地域・大学から参加を募り、本学での研修を通じてハブ的な交流を行うことも目指しているため、本来は基本的に1大学から2名以内の参加を求めているが、今回は、当初想定していたより応募が少なかったため、参加希望者の多い輔仁大学に再度呼びかけをし、同大より計7名の参加となった。なお、台湾からの学生8名は皆日本語専攻で、韓国からの4名は日本語以外の専攻（東アジア、船舶工学、国際貿易）であった。

2-2. 研修期間

平成22（2010）年6月27日(月)から7月8日(金)の2週間。

2-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

授業・体験学習・体験学習はいずれも、午前は10:00～11:50、午後は13:00～14:50である。（授業の場合は50分単位で10分休憩をはさみ、体験学習・学外実習もこの時間設定に準ずる。）

6 / 27(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：ロン) 18:00～：情報交換会	6 / 28(火)	午前：授業「会話」(担当：和田) 午後：企業見学「石丸製麺」(担当：市村国際グループ員)
-----------	--	-----------	---

6 / 29(水)	午前：授業「読解」(担当：高水) 午後：体験学習「茶道」 (講師：裏千家茶道部、 担当：正楽)	7 / 4(月)	16：00まで：ホームステイ
6 / 30(木)	午前：体験学習「華道」 (講師：明石、担当：ロン) 午後：授業「日本事情」 (担当：正楽)	7 / 5(火)	午前：授業「聴解」 (担当：和田) 午後：学外実習「四国村」 (担当：高水)
7 / 1(金)	午前：学外実習「栗林公園」 (担当：塩井) 午後：授業「日本事情」 (担当：ロン) 16：00～：ホストファミリーとの対面 式、ホームステイ	7 / 6(水)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：授業「会話」(担当：正楽)
7 / 2(土)	終日：ホームステイ	7 / 7(木)	午前：授業「作文」(担当：高水) 午後：体験学習「書道」 (講師：書道部、担当：正楽)
7 / 3(日)	終日：ホームステイ ※小豆島日帰り旅行(自由参加)	7 / 8(金)	午前：授業「総合」(担当：塩井) 16：30～：研修体験発表会 17：30～：修了式 18：00～19：30：意見交換・ 反省会

2-4. 授業・体験学習・学外実習・企業見学

授業科目の設定は従来どおりである。これまで同様、初日の「総合」の時間にはプログラム全体についての注意事項、ホームステイ前の「日本事情」クラスでは、円滑なホームステイ実施のため、日本の家庭生活についての説明や、ステイに係る注意点について、周知・確認を行った。

体験学習・学外実習については、第12回以降同様、引率担当教員をあらかじめ決めておく体制をとった。基本的には専任教員が引率を担当するが、専任教員が全員都合がつかない時に限り、国際グループの職員に引率を依頼した。

体験学習では、昨年夏季の第12回で初めて「盆踊り」を取り入れてみたが、プログラム内容の再考を図り、今回は盆踊りは入れないこととした。第12回では、盆踊り時に浴衣を着る体験もしたが、これは研修生に好評だったこともあり、今回は華道体験の際に浴衣体験も併せて行った。(華道と盆踊りの講師は、いずれも学外の同一の方に講師を依頼しており、浴衣もその方に着付けしていただいている。)浴衣を着るのは夏ならではの体験であり、浴衣を着て花を生けることで、華道体験がより日本的なものになったように感じられた。

茶道は、本学にある三つの茶道部、すなわち表千家・裏千家・石州流のいずれかに協力をお願いする形をとっており、今回は裏千家に協力してもらった。

書道も、従来どおり本学書道部に講師として指導してもらった。茶道も華道も、日本の伝統文化を学ぶだけでなく、同世代の学生同士が交流することにも意義があると思われる。両部とも9名の部員が参加してくれ、楽しく日本文化が学びながら交流できたようである。

学外実習では、昨年同様「栗林公園」と「四国村」の2か所に行った。

また、第11回以降行っていなかった「石丸製麺」の見学も、今回は実施した。石丸製麺は、展示や説明が分かりやすく、工場見学もうどんの試食もできるため、毎回研修生には好評である。

2-5. その他

昨年第12回より、初日の情報交換会を従来より30分遅らせ、18:00開始とした。また、ホームステイ前のホストファミリー対面式も、従来より1時間遅らせ、16:00からとした。これらの時間帯のほうが関係者にとって都合がよいようなので、今後もこの時間設定で進めていきたいと思う。

今回からの変更点または新たな点として、前述のとおり定員を10名に減らしたこと、期間中研修生との交流やサポートを行う「Buddies」制度を設けたこと、プログラムの準備・実施において、事務（国際グループ）主導から留学生センター教員主導に以降させたことが挙げられる。

Buddies は、これまで本学の国際交流サークル「ICES（アイセス：Inter Cultural Exchange Society）」に任せていた研修生との交流・サポートを、本プログラムのサポート要員として希望する本学学生に実施させるようにしたものである。これは、希望者に自覚を持って主体的に研修生と関わってもらうことを目指し、また、このような制度を設けることで、ICES 部員以外の国際交流に興味を持つ学生にも参加してもらうことも意図している。初めての試みであり、いわば試行的ではあったが、今後の展開次第でうまく機能していきそうな手ごたえがあったため、次回以降も Buddies 制度は継続させていくこととした。

運営体制の教員へのウエイト以降については、これも今回初めてということスムーズにはいかない部分もあったかもしれないが、国際グループの支援がなければ実施は難しいということもあり、今後とも教員と職員が連携し、よりスムーズな運営を目指していきたい。

2-6. 第15回プログラムを振り返って

何度プログラム実施を重ねても、毎回反省事項や新たな問題点は出てくるものである。

今回の反省点としては、開講式前日のチェックイン時刻を指定すること（対応する教員側の負担軽減、注意事項周知の効率化、Buddies との対面・交流のため）、宿泊の際の部屋（個室か相部屋か）は本学側で決定することを要周知（部屋割への不満が出て、対応に苦慮したため）、日本語の辞書の持参を求めること（学習の効率化のため）等がある。これまでチェックイン時には本学教員や Buddies 学生が高松駅まで迎えに行き、大学に連れてくる体制にしていたが、迎え担当者の調整や駅での対面がなかなかうまくいかないこともあり、今後は迎えはなしとすることとした。

また、今回初めてのケースとして、宿泊施設でヘアカラー剤を使用し洗面台を汚した学生がいたこと、大学のプールを使用したいと申し出があったこと、学外見学时、学長の急用により公用車の運転手に定刻に対応してもらえなかったこと等も、記録として追記しておく。運転手遅れの件は、見学先に到着遅れの連絡を入れ、その後の時間割もずらすなどして対応したが、こういった予期せぬ事態にも臨機応変に対応できる備えが必要だと痛感した。

こういった諸々のハプニングはあったものの、全体としては、研修生も満足し、Buddies 学生や体験学習の講師も楽しめるプログラムになったことは、準備・実施担当教員としてほっとしている。研修生の修了作文を読むと、やはりホームステイについて書かれたものが多く、毎回ホストファミリーの皆様のご協力が本プログラムの成功に結び付いていると、感謝の念を新たにす。また、台湾の真理大学からの参加学生は、本学に留学中の同大の先輩と会ったり、過去に同大に留学していた本学日本人学生と会ったりと、思わぬ出会いも楽しんだようで、このような体験も本プログラムの思い出に色を添えてくれるものと思う。

3. 第16回日本語語学研修プログラム

3-1. 研修生

台湾より4名、韓国より5名、計9名の参加があった。内訳は、真理大学2名（台湾）、輔仁大学6名（台湾）、誠信女子大学1名（韓国）、韓国海洋大学4名（韓国）である。参加学生の専攻別に見ると、日本語専攻が3名、英語専攻が1名、その他5名（衣類、環境工学、海洋環境、船舶運航管理、経済）であった。

第16回にして初めて、協定大学である誠信女子大学から参加があったのは、非常に嬉しいことである。（当初、同大からは2名の応募があったが、残念ながらうち1名が体調不良のため直前にキャンセルとなった。）なお、この誠信女子大学からの1名は、後日、本学経済学部の教員と学生が同大を訪問した際、案内役として活躍してくれたと聞いている。プログラム終了後もつながりが継続・展開するのは嬉しい限りである。

3-2. 研修期間

平成24（2012）年1月30日(月)から2月10日(金)の2週間。

本プログラムの主な参加学生は台湾および韓国の出身者であるため、例年そうであるが、冬季プログラムの実施時期は、旧暦の正月に重ならないよう、配慮している。また、本学学生との交流の場が持てるよう、本学の期末試験時期とも重ねない配慮も必要である。

3-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

1 / 30(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：高水) 18：00～：情報交換会	2 / 3(金)	午前：授業「日本事情」 (担当：ロン) 午後：企業見学「石丸製麺」 (担当：ロン) 16：00～：ホストファミリーとの対面 式、ホームステイ
1 / 31(火)	午前：授業「日本事情」 (担当：ロン) ※時間内にインターナショナル オフィス長表敬訪問を含む。 午後：授業「総合」(担当：塩井)	2 / 4(土)	終日：ホームステイ
2 / 1(水)	午前：授業「日本事情」 (担当：ロン) 午後：体験学習「書道」 (講師：書道部、担当：正楽)	2 / 5(日)	終日：ホームステイ
2 / 2(木)	午前：授業「日本事情」 (担当：ロン) 午後：授業「総合」(担当：塩井)	2 / 6(月)	16：00まで：ホームステイ

2 / 7 (火)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：体験学習「華道」 (講師：明石、担当：高水)	2 / 9 (木)	前日：学外実習「小豆島」 (担当：高水)
2 / 8 (水)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：体験学習「茶道」(講師： 石州流茶道部、担当：塩井)	2 / 10 (金)	午前：授業「総合」(担当：高水) 16：30～：研修体験発表会 17：30～：修了式 18：00～19：30：意見交換・ 反省会

3-4. 授業・体験学習・学外実習

授業科目は、授業数に比して科目の種類が多いという前回の反省をふまえ、今回は「総合」「作文」「日本事情」の3種類にしてみた。「総合」の中身としては、読解、聴解、会話、4技能を総合的に扱うもの等であり、各時間の担当教員に一任される。

体験学習の茶道は、本学に三つある茶道部（表千家・裏千家・石州流）のうち、今回は石州流茶道部に講師を引き受けてもらい、石州流の作法を学んだ。

書道も、従来どおり本学書道部に講師として指導してもらった。従来同様、茶道も書道も、同世代同士で交流しながら楽しく日本文化を学べたようである。

学外実習では、今回初めて、1日かけて「小豆島」見学へ行くこととした。これは、小豆島で外国人向けのツアーを企画・実施しているボランティア団体「島たび」からのお誘いがあったことに加え、毎年夏季プログラムでは、研修生も本学のICES・KUFSA主催の日帰り島旅行（男木島・女木島・小豆島の3つを毎年交代で旅行）に参加できるが、冬季には島へ行く機会がないこともあり、実施を決めたものである。本学の課外教育行事のように多人数だと入れないような、小さな醤油蔵等も見学でき、また、少人数ゆえ各種注意事項も徹底しやすく、いろいろメリットもあったようである。今後も、冬季プログラムにはこの小豆島見学を取り入れていきたいと考えている。

小豆島見学を取り入れたことにより、時間の都合等もあり、毎行っていた「栗林公園」と「四国村」の見学は割愛した。研修生の中には、ホストファミリーとこれらの場所を訪問した者もいたようである。

3-5. その他

昨年度より各部局で開始されたJASSO「SSプログラム」(ショートステイプログラム)では、プログラム参加学生がインターナショナルオフィス長を表敬訪問している。我々の日本語語学研修プログラムでは、これまでこういった表敬訪問を行ってこなかったため、今回は初めて、研修時間内にインターナショナルオフィス長表敬訪問を行った。プログラムが始まって早い時期にこのような場を設けることで、研修生のモチベーションも上がったのではないかと思う。

Buddiesについては、今回よりプログラム終了後にBuddies反省会を行うこととした。残念ながら、日程の関係か参加者が少なかったが、皆国際交流に関心のある学生であるため、プログラム改善に向けての積極的な提案が多くなされ、我々教職員にとっても非常に有意義なものとなった。反省会で出された意見をふまえ、次回からはプログラム開始前にBuddies説明会と交流計画相談の場を設けることとしたい。

3-6. 第16回プログラムを振り返って

前回の反省をふまえ、今回からチェックインの時刻を事前に指示していたが、それでも2名が大幅に到着が遅れ、教員がチェックイン時の対応ができないという事態が起こった。幸い、Buddies 学生と、他の日本語が比較的できる研修生が対応してくれたため事なきを得たが、次回以降はチェックイン時の時間厳守について、より厳しく周知徹底しなければと思った。

初日の報交換会は、5コマ授業後の18:00開始としていたにも関わらず、Buddies の参加が少なく、やや残念であった。Buddies への行事参加の呼びかけを、もう少し徹底する必要があるだろう。ただ、Buddies について言えば、韓国へ語学研修に行った学生や韓国語を学習中の学生が、韓国人研修生と韓国語で交流するといった時間も持てたようで、当該研修生は印象深かったという。

プログラム内容とは直接関係はしないが、期間中、本学の広報担当職員が研修生の写真を撮って、本学ホームページに掲載してくれた。これも今回初めてのことであったが、研修生にとって良い思い出になったのではないだろうか。

今回は、留学生センター専任教員で育児休暇中の者が1名いたため、他の教員でそのぶんを担い合って運営した。非常勤講師のご協力もあり、無事終わられて安心している。

第17回・第18回日本語語学研修プログラム報告

塩井実香

1. 「日本語語学研修プログラム」の目的

本プログラムは、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介するとともに、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として平成17（2005）年より行っているものである。併せて、本研修への参加が、その後の本学への正規留学につながるようという、言わば呼び水効果の意図もある。

2012年度には、例年どおり夏季と冬季の2回実施した。以下、それぞれのプログラムについて記す。

2. 第17回日本語語学研修プログラム

2-1. 研修生

平成23（2011）年度より定員を15名から10名に減らし、2012年度も同じく定員10名で募集を行った。

結果、残念ながら半数の5名にとどまったものの、台湾より3名、韓国より2名の応募があった。内訳は、台湾は、真理大学（本学協定大学）1名、輔仁大学2名、韓国は2名とも韓国海洋大学（本学協定大学）からの応募であった。専攻別にみると、台湾の3名が日本語専攻、韓国の2名がその他国際関係の専攻であった。

なお、募集要項では「6～10名」の募集を行うとし、6名未満であれば中止の可能性もあると記していたのだが、せっかく応募があったので、5名でも実施することとした次第である。

2-2. 研修期間

平成23（2011）年6月25日(月)から7月6日(金)の2週間。

2-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

授業・体験学習・体験学習はいずれも、午前は10:00～11:50、午後は13:00～14:50である。

(授業の場合は50分単位で10分休憩をはさみ、体験学習・学外実習もこの時間設定に準ずる。)

6 / 25(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：ロン) 18:00～：情報交換会	6 / 27(水)	午前：授業「さぬき学」(讃岐うどんについて)(担当：正楽) 午後：体験学習「茶道」 (講師：石州流茶道部、 担当：正楽)
6 / 26(火)	午前：インターナショナルオフィス長表敬訪問、授業「総合」(担当：塩井) 午後：体験学習「華道」(講師：華道部、 担当：塩井)	6 / 28(木)	終日：学外実習「小豆島」 (担当：ロン)

6 / 29(金)	午前：学外実習「さぬき麺業」 (担当：高水) 午後：授業「さぬき学」(讃岐うどんについて)(担当：大野呂) 16:00～：ホストファミリーとの対面式、ホームステイ	7 / 3(火)	午前：授業「さぬき学」 (担当：大野呂) 午後：学外実習「栗林公園」 (担当：高水)
6 / 30(土)	終日：ホームステイ	7 / 4(水)	午前：体験学習「華道」(講師：華道部、担当：正楽) 午後：授業「作文」(担当：塩井)
7 / 1(日)	16:00まで：ホームステイ	7 / 5(木)	午前：授業「日本事情」(担当：正楽) 午後：授業「作文」(担当：高水)
7 / 2(月)	午前：授業「日本事情」(担当：正楽) 午後：学外実習「栗林公園」 (担当：高水)	7 / 6(金)	午前：授業「総合」(担当：高水) 13:30～ 花・花器の片付け 15:00～ 着物の着付け 16:30～ 研修体験発表会 17:30～ 修了式 18:00～19:30 意見交換・反省会

2-4. 授業・体験学習・学外実習・企業見学

授業に関して特筆すべきこととしては、「さぬき学」を設けたことである。これは、本学の短期研修プログラムの独自性をより打ち出すべく、香川県に焦点を当てた授業を行おうということで新たに設けたものである。今回は特に「讃岐うどん」をテーマとし、讃岐うどんに関わる学習やグループ発表等を行った。また、さぬき学に関連して、従来はうどん工場に見学に行っていたのだが、今回からは見学先を、見学だけでなくうどん打ち体験もできる先へ変更した。もともとアジアの学生はうどんが口に合うのか、研修期間中もよくうどんを食べに行っていたが、今回は実際に自分で打って食べるという体験ができ、非常に印象に残ったようである。

学外実習では、従来どおり「栗林公園」と「四国村」を予定していたが、「四国村」へ行くはずの日に雨天となったため、急遽、屋内で見学のできる「県立ミュージアム」へと行き先を変更した。

茶道では、本学に三つある茶道部(表千家、裏千家、石州流)のうち、今回は石州流の協力を得ることができた。茶道体験をした後で、栗林公園へ見学に行ってお茶席を体験できるよう日程を組んだので、学んだことが実践として身に着いたのではないと思われる。

2-5. その他

今回からの変更点として、週末のホームステイを、3泊4日(金曜夕方～月曜夕方)から2泊3日(金曜夕方～日曜夕方)にしたことが挙げられる。これは、ホストファミリーへのアンケートの際、3泊4日は長いという意見があったことを考慮したものである。本プログラムでは、毎回、ホームステイが好評で、ホストファミリーへの負担を軽減し、今後も継続的に協力が得られるように配慮した。結果として、2泊3日でよさそうだと判断したため、次回以降も2泊3日で実施予定である。

あとは、小さなことではあるが、最終日のプログラムの中に、着物(浴衣)体験を組み込んだこ

とがある。これまでも、ボランティア講師の協力により、最終日は研修生は着物を着て体験発表を行い、その後の意見交換・反省会にも出ていた。これを、プログラムの一環として位置づけることにしたものである。

2-6. 第17回プログラムを振り返って

研修生5名という少人数でのプログラム実施となったが、Buddies13名のサポートも得て、全員が仲良く楽しみながら研修を行えたと思う。今回より導入した「さぬき学」も、今後さらに充実したオリジナリティーある授業にしていきたい。

3. 第18回日本語語学研修プログラム

3-1. 研修生

台湾より4名、韓国より4名、計8名の参加があった。内訳は、台湾が4名とも輔仁大学で、韓国が、誠信女子大学（本学交流大学）1名（韓国）、漢陽大学（同）2名、建国大学1名であった。

実は、当初締切までに4名しか応募者がおらず、6名未満の場合は中止もありうるということで周知していたのだが、せっかく応募者があったのだからと、台湾・韓国の大学に追加募集の呼びかけをし、結果計8名となった次第である。漢陽大学からの参加は第16回目にして初めてなのだが、同大からの2名はいずれも追加募集時に応募してくれたものである。

なお、参加学生の専攻別に見ると、8名中6名が日本語専攻で、あとの2名は原子力工学と国際貿易であった。

3-2. 研修期間

平成25（2013）年1月21日(月)から2月1日(金)の2週間。

本プログラムの主な参加学生は台湾および韓国の出身者であるため、例年そうであるが、冬季プログラムの実施時期は、旧暦の正月に重ならないよう、配慮している。また、本学学生との交流の場が持てるよう、本学の期末試験時期とも重ねない配慮も必要である。

さらには、本学側の事情として、プログラム期間中に大学入試センター試験が入らないように、ということも配慮して期間を設定している。なお、今回は、プログラム直前の週末がセンター試験となり、従来どおり開講式前日の日曜夕方に研修生が幸町会館にチェックインすることが難しいため、前週金曜日の夕方にチェックイン、という形をとった。

3-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

1 / 21(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：ロン) 18:00～：情報交換会	1 / 22(火)	午前：授業「総合」、国際オフィス長表敬訪問 (担当：大野呂) 午後：体験学習「香川漆器（蒔絵）」 (担当：塩井)
-----------	--	-----------	---

1 / 23(水)	午前：授業「日本事情」 (担当：ロン) 午後：体験学習「書道」 (講師：書道部、担当：正楽)	1 / 28(月)	午前：授業「総合」(担当：塩井) 午後：学外実習「四国村」 (担当：ロン)
1 / 24(木)	午前：授業「さぬき学」 (担当：高水) 午後：体験学習「茶道」 (講師：裏千家茶道部、 担当：塩井)	1 / 29(火)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：体験学習「華道」 (講師：明石、担当：高水)
1 / 25(金)	午前：学外実習「さぬき麺業」 (担当：ロン) 午後：授業「さぬき学」 (担当：正楽) 16：00～：ホストファミリーとの対面 式、ホームステイ	1 / 30(水)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：体験学習「茶道」(講師： 石州流茶道部、担当：塩井)
1 / 26(土)	終日：ホームステイ	1 / 31(木)	前日：学外実習「小豆島」 (担当：高水)
1 / 27(日)	16：00まで：ホームステイ	2 / 1(金)	午前：授業「総合」(担当：高水) 16：30～：研修体験発表会 17：30～：修了式 18：00～19：30：意見交換・ 反省会

3-4. 授業・体験学習・学外実習・企業見学

今回も「さぬき学」を設けた。ただし、内容は讃岐うどんに限定せず、うどんを含む香川事情、ということで少し大きい括りとした。前回に引き続き、うどん打ち体験も組み込んだ。

その他の授業科目については、従来どおりである。

体験学習・学外実習については、第16回・第17回で実施した小豆島日帰りツアーは、これまでの反省も踏まえ、今回からは入れないこととした。

今回新たに取り入れたこととしては、「香川漆器（蒔絵）」体験である。これは、たまたま本学経済学部でプログラム期間中に香川漆器体験講座全3回のうち1回が実施されることが分かり、「さぬき学」との関連でも良い体験になるであろうということで、事前に関係者と打ち合わせ、研修生8名全員を受け入れてもらえることとなったものである。当日は、地元テレビ局も取材に来て、外国人学生ということで何人かインタビューも受ける等、いろいろな意味で印象的な体験となった。

茶道は、今回は裏千家茶道部に協力してもらった。本学には、表千家、裏千家、石州流の三つの宗派の茶道部があり、本当であれば三つそれぞれの部に協力を依頼したいところなのだが、実際のところは、部の活動日や練習場所・道具の置き場所等の都合により、裏千家と石州流にほぼ交替で引き受けてもらっているのが実情である。

3-5. その他

特記しておく事項として、今回初めて、プログラム開始の前週の金曜夕方に研修生の学内宿泊施設へのチェックインを行ったことがある。これは、3-2でも触れたように、開講式前日と前々日となる週末が大学入試センター試験と重なり、入構規制が敷かれるため、従来のように日曜夕方にチェックインすることが難しいと判断したためである。これにより、Buddiesにも金曜夕方に来てもらい、顔合わせや交流を行ってもらった。チェックインから開講式まで中2日空くことになったが、結果的に、この間に研修生たちは香川の地に慣れることができ、Buddiesとも十分に交流でき、また、教員側としても Buddies 学生にとっても、週末のチェックインよりは平日のほうが対応がしやすかった等、利点が多いことが分かった。Buddies にとっては、2週間の研中、週末はホームステイがあるため、これまでは平日の授業後にしか交流の時間がとれなかった。また、時期的にどうしても本学の期末試験時期と近くなることもあり、平日でも交流が思うようにできない学生もいたと聞く。しかし、チェックインを早めることで、こういった点が多少とも改善できたことは良かった。

ホームステイは、前回に引き続き2泊3日で行った。

Buddies によるサポート・交流活動も、上記のチェックイン時も含めて、順調に行われた。Buddies は、その都度募集をかけ、登録制で行っているので、毎回、初めて Buddies メンバーとなる学生ももちろんいるが、大部分の学生は毎回続けて登録・参加してくれているため、だんだんと要領が分かってきて、回を重ねるごとに交流の段取りや実際の活動が充実してきている印象を受ける。

3-6. 第18回プログラムを振り返って

研修生の再募集、チェックインの日を早める、香川漆器体験を取り入れる等、第17回目にして初めてのこともいくつかあったが、いずれも結果的に吉と出たように思う。本プログラムは、いくら回を重ねても反省点や改善点は出てくるが、回を重ねてきたからこそその良さ、本学らしさというものをさらに打ち出すべく、今後も改善を図れるところは積極的に改めたり新しいことに挑戦したりしていきたいと思っている。

第19回日本語語学研修プログラム報告

塩井実香

1. 「日本語語学研修プログラム」の目的

本プログラムは、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介するとともに、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として平成17（2005）年より行っているものである。併せて、本研修への参加が、その後の本学への正規留学につながるようという、言わば呼び水効果の意図もある。

平成24（2012）年度には、例年どおり夏季と冬季の2回実施した。以下、それぞれのプログラムについて記す。

2. 第19回日本語語学研修プログラム

2-1. 研修生

定員10名、最低履行人数5名に対し、6名の応募があり、実施に至った。

参加者の内訳は、韓国の清州大学から4名、台湾の真理大学から2名で、両大学とも本学の学術交流協定校である。もともと、各大学より2名程度ということで学術交流協定大学を中心に交流のある募集をかけていたが、応募者数ゼロの大学が多かったことから、清州大学からの希望者全員を受け入れることとなった次第である。

同大学からは今回初参加であり、初参加の大学からの希望者が多かったのは嬉しいことであった。（なお、同大学からは当初5名の参加申し込みがあり、5名全員を受け入れる予定にしていたが、就職活動の関係で1名辞退し、4名の参加となった。）

本プログラムの参加者は、これまで、女子学生のほうが多い、もしくは女子学生のみ、というのがほとんどだったが、今回は珍しく男性4名、女性2名という構成となったことは印象深い。（ちなみに、上記の辞退者1名も男性であった。）

2-2. 研修期間

平成25（2013）年7月1日(月)から7月12日(金)の2週間。

研修生は、研修期間中、本学キャンパス内の宿泊施設「幸町会館」に宿泊する。以前は研修開始日の前日、すなわち日曜日にチェックインさせていたが、前回第18回プログラム（冬季）時に、大学入試センター試験実施に伴う週末入構制限の関係で金曜チェックインにしたところ、後述する本学バディーズ学生との交流や香川の地に慣れるという意味で週末有意義に過ごせたことから、今回第19回プログラムでも、宿舍チェックインは6月28日(金)とした。

2-3. 研修日程・研修内容

以下の日程で行った。

授業・体験学習・体験学習はいずれも、午前は10:00~11:50、午後は13:00~14:50である。（授業の場合は、台湾・韓国の大学の時間設定に倣って50分単位で設定し、10分休憩をはさむこととしている。体験学習・学外実習もこの時間設定に準ずる。）

7 / 1 (月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：ロン) 18：00～：情報交換会	7 / 7 (日)	16：00まで：ホームステイ
7 / 2 (火)	午前：インターナショナルオフィス長 表敬訪問、授業「総合」 (担当：高水) 午後：授業「日本事情」 (担当：細田)	7 / 8 (月)	午前：体験学習「華道」(講師：華道部、 担当：塩井) 午後：授業「さぬき学」 (担当：高水)
7 / 3 (水)	午前：授業「総合」(担当：塩井) 午後：体験学習「茶道」 (講師：石州流茶道部、 担当：正楽)	7 / 9 (火)	午前：学外実習「四国村」 (担当：ロン) 午後：授業「総合」 (担当：塩井)
7 / 4 (木)	午前：学外実習：栗林公園 (担当：細田) 午後：授業「さぬき学」 (担当：正楽)	7 / 10 (水)	午前：授業「作文」(担当：高水) 午後：体験学習「書道」(講師：書道部、 担当：正楽)
7 / 5 (金)	午前：学外実習「さぬき麺業」 (担当：高水) 午後：授業「日本事情」 (担当：細田) 16：00～：ホストファミリーとの対面 式(担当：高水・塩井)、 ホームステイ	7 / 11 (木)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：授業「日本事情」(担当：ロン)
7 / 6 (土)	終日：ホームステイ	7 / 12 (金)	午前：授業「総合」(担当：正楽) 14：00～ 花・花器の片付け 14：45～ 着物の着付け 16：30～ 研修体験発表会 17：30～ 修了式 18：00～19：30 意見交換・反省会

2-4. 授業・体験学習・学外実習・企業見学

授業、体験学習、学外実習等の設定は従来どおりで、特に変更はない。日本語非常勤講師の協力が得られる時には授業を担当してもらっているが、今回は都合が合わなかったため、専任教員のみで各種担当を分担した。

「日本事情」の授業においては、日本について記事を書き壁新聞のようなものを作ったり、香川についてプレゼンテーションをしたりする時間も設けられた。学習中の日本語を使い、より深く日本や香川を知る好機になったと思われる。

茶道・華道・書道は、従来どおり本学の当該サークルの学生に指導を依頼しており、同世代同士の交流という意味でも充実した時間となっている。最終日の着物の体験も、従来どおり地元で国際交流活動をなさっている講師の方々にボランティアでご協力いただいた。

なお、茶道については、栗林公園見学時にお茶席の体験もさせているので、なるべく栗林公園見学前にあらかじめ勉強させておきたいと思っているのだが、今回は茶道部ともうまく調整が付き、

栗林公園見学の前日にひととおり勉強・体験できて、翌日の実践につながったので、よかった。

2-6. バディーズについて

第17回プログラムから、バディーズという制度を設けた。国際交流に関心のある本学の学生を募り、研修期間中、研修生の生活のサポートをしたり交流したりして過ごしてもらうものである。自ら手を挙げてくれるだけあって、非常に意欲的に、また親切丁寧に研修生と接してくれ、我々関係教職員にとっては非常に頼もしい存在である。研修生の渡日前から Facebook で連絡を取り合うなどして関係を構築してくれ、研修終了後も関係を続けていることは、研修生にとってもバディーズ学生にとっても好ましいことであると言える。バディーズは日本人に限定していないため、第18回以降は本学在籍中の留学生でバディーズを務めてくれる学生もおり、香川での経験が長い先輩として一役買ってくれているようである。

2-6. 第19回プログラムを振り返って

文化体験の講師を務めてくれた学生たち、バディーズ、ホストファミリーの皆様、その他関係各位のご協力のおかげで、滞りなくプログラムを終えることができた。研修生たちの修了作文やアンケートからも、非常に満足できる研修プログラムとなったことが窺える。

本学における留学生受け入れ計画等の関係で、本プログラムは残念ながら第20回をもって終了することが決まったが、最終回となる第20回も、第19回同様充実したものにしたと思える2週間であった。

3. 第20回日本語語学研修プログラム

例年どおり冬季に実施予定で計画を立て、募集を行ったのだが、追加募集もしたものの応募者が最低履行人数の5名に満たなかったため、次年度送りとする事とした。応募者が少なく実施を見送ったのはこれが初めてのことである。毎回、参加希望者の多い主たる協定校での行事、冬季の場合は旧例の正月等について事前に調べ、できるだけ参加しやすい日程を考えているのだが、明確な理由は不明だが、この回に限っては奏功しなかったようである。

第20回日本語語学研修プログラム報告

高 水 徹

1. 本プログラムの目的

本プログラムは、「外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ること」を目的として、平成17（2005）年より実施してきた。近年は、香川県に関する学習を充実させるため、「さぬき学」を研修に含めてきた。

本学としては、研修生の本プログラムによる本学滞在が、より長期の留学につながる効果も期待している。

なお、本プログラムは今回が最終回となり、このような形態での短期受入れプログラムは今後実施しないことになった。

2.

2-1. 研修生

今回の研修生は8名である。輔仁大学（台湾）からは5名の研修生が参加した。所属は全て外国学部日本語学科で、1年生が3名、2年生が2名である。清州大学（韓国）からは3名の研修生が参加した。所属は全て日語日文学科であり、全員4年生である。なお、同大学は本学の協定校の1つである。

以前より、本プログラムの参加者は女性が多かったが、今回も同様に、女性が7名で、男性は1名のみであった。

2-2. バディーズ

今回は8名の本学学生がバディーズとして活動した。所属は3学部（経済、教育、法）に分散しており、学年もまちまちである。本プログラムのバディーズは、研修生と1名ずつ対応させるシステムにはしていないが、これだけの人数がいると、活動に幅も生まれ、本学学生間の連携も取りやすい。

2-3. ホストファミリーとホームステイ

今回、ホストファミリーを引き受けていただいたのは5つの家庭であり、3家庭には2名を受入れていただいた。いつもながら本学の国際関連活動にご協力いただき、大変ありがたいことである。

ホームステイは前回までと同様、金曜日夕方から日曜日夕方までの2泊3日である。

例年通り、ホームステイにおける注意事項は、授業を用いてしっかり伝達している。

なお、ホストファミリーの皆様方にも、本プログラムの終了に関してはお伝えしてある。

2-4. 研修期間

平成26（2014）年6月23日(月)から7月4日(金)の2週間。

研修生たちは、通常通り、本学キャンパス内の宿泊施設である幸町会館に、研修開始前日の日曜日にチェックインしている。

2-5. 研修日程表

以下の表において、一部例外を除き、「午前」は10:00から11:50、「午後」は13:00から14:50を表わしている。

6 / 23(月)	午前：開講式、ガイダンス 午後：授業「総合」(担当：ロン) 16:00～：国際ナショナルオフィス長表敬訪問 18:00～：情報交換会	6 / 29(土)	16:00まで：ホームステイ
6 / 24(火)	午前：授業「総合」(担当：和田) 午後：授業「さぬき学」(担当：ロン)	6 / 30(月)	午前：学外学習「栗林公園」 (担当：高水) 午後：授業「総合」(担当：高水)
6 / 25(水)	午前：授業「総合」(担当：塩井) 午後：体験学習「書道」(講師：書道部)	7 / 1(火)	午前：学外学習「四国村」(担当：細田) 午後：授業「総合」(担当：塩井)
6 / 26(木)	午前：学外学習「さぬき麺業」 (担当：ロン) 午後：授業「さぬき学」 (担当：細田)	7 / 2(水)	午前：授業「作文」(担当：高水) 午後：体験学習「茶道」(講師：石州流茶道部、担当：ロン)
6 / 27(金)	午前：授業「日本事情」(担当：細田) 午後：体験学習「華道」(講師：華道部、 担当：塩井) 16:00～：ホストファミリーとの対面式 (担当：高水)	7 / 3(木)	午前：授業「作文」(担当：塩井) 午後：授業「日本事情」(担当：細田)
6 / 28(土)	終日：ホームステイ	7 / 4(金)	午前：午前：授業「総合」 (担当：高水) 13:30～：花・花器の片づけ 15:00～：着物の着付け (仏生山国際交流会の 明石氏、十河氏) 16:30～：研修体験発表会 17:30～：修了式 18:00～19:30：意見交換・反省会

2-6. 研修内容

「さぬき学」においては、栗林公園、さぬきうどん、観光等が取り上げられた。歴史や背景などに加えて、実際のメニューなど具体的な知識の習得やディスカッションが行われ、本学に滞在しなければ学べない、あるいは実地に目にするできない内容であった。

「日本事情」においては、「さぬき学」とも関連して、観光に関するグループ発表が行われ、特に今回の研修生は一定の日本語力を持ち、かつ、真摯に取り組んだために、内容の充実したものとなった。

その他の授業においても、過度にリラックスすることなく、かつ、楽しく学んでいた様子がか

がえ、気が抜けてしまいがちな最終日においても、活発に質問が出たことが印象的であった。

学外実習に関しても上記の研修生の特質がよく表われており、実習後の授業でその内容を振り返っても、しっかりと学習したことが確認できた。一方で、事前に何度も注意しても蚊の対策が十分ではなく、多くの学生が刺されていたのは例年通りである。

栗林公園の窓口対応や予約システムが毎年のように若干異なっているため、せっかく前年度のコメント等を引き継いでも現場で急遽対応することがあり、大きな問題はなかったものの、何かこちらで伝達ミスがあったかと不安になることがあった。

今回の茶道担当は本学の3つの茶道部のうち、石州流であった。華道は華道部に、また、着物の着付けおよび着物の貸し出しは、仏生山国際交流会の明石氏、十河氏にご協力いただいた。

2-7. 第20回プログラムを振り返って

今回は、参加した研修生の真摯な態度が際立っていた。加えて、日本語能力も一定水準を満たしていた。これにより、本プログラムが重点を置いている、実地における体験に集中して取り組むことができた。グループ発表においても、最終発表においても、あまり「手心」を加えずに実施することができた。研修生たちは本学で毎週月曜日に実施している国際交流行事である Monday Event にも、積極的に参加してくれた。

先に述べたように、本プログラムは今回をもって終了することになっている。これまで百日咳の流行による中止、募集したものの日程等の都合で研修生が集まらなかったことを含め、いくつかの「困難」はあったものの、20回にわたり本プログラムを実施することができたのは、学外の皆様方、本学学生を含め、関連する全ての方々のご支援のおかげである。ここに改めて感謝の意を表したい。

本プログラムの実施により獲得したノウハウは、今後別の形で活かして、本学の留学生受入れを充実させていく所存である。

3. 研修実施に係るデータ

3-1. 実施時期および期間

	実施時期	期間
第1回	平成17(2005)年6月27日～7月9日	2週間
第2回	平成18(2006)年2月6日～2月18日	2週間
第3回	平成18(2006)年6月26日～7月8日	2週間
第4回	平成18(2006)年8月21日～8月25日	1週間
第5回	平成19(2007)年1月22日～2月3日	2週間
第6回(※1)	(当初予定:平成19(2007)年6月27日～7月28日)	(当初予定:4週間)
第7回	平成20(2008年)年1月21日～2月2日	2週間
第8回	平成20(2008年)年6月23日～7月18日	4週間
第9回	平成21(2009)年1月19日～1月30日	2週間
第10回	平成21(2009)年6月29日～7月24日	4週間
第11回	平成22(2010)年1月25日～2月5日	2週間
第12回	平成22(2010)年6月28日～7月9日	2週間
第13回	平成22(2010)年7月27日～7月30日	4日間
第14回	平成23(2011)年1月17日～1月28日	2週間
第15回	平成23(2011)年6月27日～7月8日	2週間
第16回	平成24(2012)年1月30日～2月10日	2週間
第17回	平成24(2012)年6月25日～7月6日	2週間
第18回	平成25(2013)年1月28日～2月1日	2週間
第19回	平成25(2013)年7月1日～7月12日	2週間
第20回(※2)	平成26(2014)年6月23日～7月2日	2週間

※1 プログラムを計画し、学生募集も行ったが、本学における百日咳流行に伴う全学休講のため中止。

※2 当初は平成26(2014)年1月9～24日に実施予定だったが、2次募集まで行ったものの最小実施人数に達しなかったため延期。

3-2. 参加学生

	人数	内 訳											日本語専攻/非専攻の別	
		性別		出身別			学年別					専攻	非専攻	
		男性	女性	韓国	台湾	中国	1年生	2年生	3年生	4年生	修士1年			
第1回	17	5	12	17	0	0	0	6	4	7		15	2	
第2回	13	7	6	2	11	0	0	9	4	0		1	12	
第3回	6	1	5	6	0	0	2	2	0	2		2	4	
第4回	22	6	16	0	0	22	8	9	5	0		0	22	
第5回	19	3	16	0	19	0	3	5	3	8		14	5	
第6回(※1)														
第7回	8	1	7	3	5	0	0	3	1	4		3	5	
第8回	9	2	7	9	0	0	6	0	2	1		8	1	
第9回	16	3	13	8	8	0	1	6	4	5		5	11	
第10回	14	5	9	8	5	1	0	6	6	2		8	6	
第11回	14	0	14	9	3	2	0	5	6	3		6	8	
第12回	7	3	4	4	3	0	0	5	0	2		2	5	
第13回	15	2	13	0	0	15	4	3	2	5	1	0	15	
第14回	11	3	8	5	6	0	2	1	7	1		6	5	
第15回	12	3	9	4	8	0	0	8	4	0		8	4	
第16回	9	1	8	1	8	0	0	4	3	2		3	6	
第17回	5	1	4	2	3	0	0	1	2	2		3	2	
第18回	8	2	6	4	4	0	1	4	2	1		6	2	
第19回	6	4	2	4	2	0	2	0	3	1		4	2	
第20回	8	1	7	3	5	0	3	2	0	3		8	0	
計	219	53	166	89	90	40	32	79	58	49	1	102	117	

※1 プログラムを計画し、学生募集も行ったが、本学における百日咳流行に伴う全学休講のため中止した。

出身大学別内訳 (ゴシックは交流協定大学)

	韓 国									台 湾			中 国	
	韓 国 海 洋 大 学	南ソウル 大 学 (※2)	大邱 大 学	建 国 大 学	蔚 山 科 学 大 学	ハン バ ッ ト 大 学 (※3)	誠 信 女 子 大 学	漢 陽 大 学	清 州 大 学	南 台 科 技 大 学	真 理 大 学	輔 仁 大 学	河 北 医 科 大 学	北 京 工 業 大 学
第1回	2	15												
第2回	1								12					
第3回		1	5											
第4回												22		
第5回									19					
第6回														
第7回				3						5				
第8回		9												
第9回				3	5					5	3			
第10回		3	2	3						2	3		1	
第11回				1		5				3	3		2	
第12回	3			1		1					2			
第13回												15		
第14回	5										6			
第15回	4									1	7			
第16回	4						1			2	2			
第17回	2									1	2			
第18回				1			1	2			4			
第19回								4		2				
第20回								3			5			
大学別計	21	28	7	12	5	6	2	2	7	31	21	37	37	3

3-3. 担当教職員

	留学生センター専任教員	国際研究支援センター専任教員	同非常勤講師	主たる担当事務職員
第1回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		広嶋伸子、石井敬子、和田方子	留学生グループ 白井修
第2回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		長田佳奈子	留学生グループ 白井修
第3回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		広嶋伸子	留学生グループ 白井修
第4回	ロン・リム、高水徹			留学生グループ 白井修
第5回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		広嶋伸子	留学生グループ 白井修
第6回(※1)				
第7回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		和田方子	留学生グループ 白井修
第8回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		和田方子、大野呂節子	留学生グループ 藤川勝
第9回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	留学生グループ 藤川勝
第10回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ(※2) 宮脇みどり
第11回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ 宮脇みどり
第12回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ 宮脇みどり
第13回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		—	国際グループ 宮脇みどり
第14回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ 宮脇みどり、市村佳央里
第15回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		和田方子	国際グループ 市村佳央里
第16回	ロン・リム、高水徹、塩井実香		—	国際グループ 市村佳央里
第17回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ 市村佳央里
第18回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍		大野呂節子	国際グループ 市村佳央里
第19回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍	細田尚美(※3)	—	国際グループ 池田 紗和子
第20回	ロン・リム、高水徹、塩井実香、正楽藍	細田尚美	和田方子	国際グループ 福家徹也、浅野文恵

※1 第6回は、百日咳流行に伴う全学休講のため中止。

※2 旧留学生グループ。事務組織再編に伴う名称変更。

※3 留学生センターと共に「インターナショナルオフィス」に属する国際研究支援センターの教員にも担当教員として加わってもらうこととした。

3-4. 学外実習

	観光名所等	文化施設等	企業、研究所等	香川大学内
第1回	金比羅宮、金丸座、引田町、直島(※2)	歴史博物館、サンポート	—	
第2回	栗林公園、玉藻公園	歴史博物館、サンポート、香川県庁展望台、香川県文化会館	穴吹工務店アメニティデザインラボ、産業技術総合研究所四国センター	工学部
第3回	栗林公園、玉藻公園	歴史博物館、サンポート	財団法人香川県下水道公社見学、三谷製糖羽根さぬき本舗	
第4回	栗林公園、玉藻公園	歴史博物館	—	医学部、附属病院
第5回	栗林公園、玉藻公園	歴史博物館、サンポート	隆祥産業株式会社、四国新聞社	
第6回(※1)				
第7回	栗林公園、玉藻公園	サンポート	石丸製麺株式会社、山西商店(桐下駄)	
第8回	栗林公園、玉藻公園、金比羅宮、男木島(※2)	四国村	石丸製麺株式会社、NHK高松放送局	
第9回	栗林公園	四国村	石丸製麺株式会社	
第10回	栗林公園、玉藻公園、金比羅宮、直島(※2)	サンポート	石丸製麺株式会社、株式会社瀬戸内海放送局(KSB)	
第11回	栗林公園、四国村	—	—	
第12回	栗林公園、小豆島(※2)	四国村	—	
第13回	栗林公園	—	—	医学部、附属病院
第14回	栗林公園	四国村	—	
第15回	栗林公園	四国村	石丸製麺株式会社	
第16回	小豆島(※3)	—	石丸製麺株式会社	
第17回	小豆島(※3)、栗林公園	四国村	さぬき麺業株式会社	
第18回	栗林公園	四国村	さぬき麺業株式会社	
第19回	栗林公園	四国村	さぬき麺業株式会社	
第20回	栗林公園	四国村	さぬき麺業株式会社	

※1 第6回は、百日咳流行に伴う全学休講のため中止。

※2 旧留学生グループ。事務組織再編に伴う名称変更。

※3 留学生センターと共に「インターナショナルオフィス」に属する国際研究支援センターの教員にも担当教員として加わってもらうこととした。

3-5. 体験学習

	体験学習	担当講師
第1回	華道	岡市氏(元本学学長の奥様)
第2回	なし	—
第3回	なし	—
第4回	なし	—
第5回	なし	—
第6回(※)		
第7回	華道(嵯峨流) 茶道(表千家)	明石氏(仏生山国際交流会) 香川大学表千家流茶道部
第8回	茶道(表千家) 華道	香川大学表千家流茶道部 香川大学華道部
第9回	茶道(表千家) 華道	香川大学表千家流茶道部 香川大学華道部
第10回	茶道(裏千家) 書道 華道	香川大学裏千家茶道会 香川大学書道部 明石氏(仏生山国際交流会)
第11回	茶道(表千家) 華道	香川大学表千家流茶道部 明石氏(仏生山国際交流会)
第12回	茶道(石州流) 華道 盆踊り	香川大学石州流茶道部 明石氏(仏生山国際交流会) 明石氏(仏生山国際交流会)
第13回	なし	—
第14回	茶道(裏千家) 書道 華道	香川大学裏千家茶道部 香川大学書道部 明石氏(仏生山国際交流会)

	体験学習	担当講師
第15回	茶道(裏千家) 書道 華道	香川大学裏千家茶道部 香川大学書道部 明石氏(仏生山国際交流会)
第16回	茶道(石州流) 書道 華道	香川大学石州流茶道部 香川大学書道部 明石氏(仏生山国際交流会)
第17回	茶道(石州流) 書道 華道	香川大学石州流茶道部 香川大学書道部 香川大学華道部
第18回	茶道(裏千家) 書道 華道 香川漆器(蒔絵)	香川大学裏千家茶道部 香川大学書道部 香川大学華道部 香川県伝統工芸士
第19回	茶道(石州流) 書道 華道	香川大学石州流茶道部 香川大学書道部 香川大学華道部
第20回	茶道(石州流) 書道 華道	香川大学石州流茶道部 香川大学書道部 香川大学華道部

※ 第6回は、百日咳流行に伴う全学休講のため中止。

3-6. ホストファミリー

	ホームステイ協力家庭
第1回※1)	22家庭 (本学在籍学生の家庭を含む)
第2回	9 家庭
第3回	6 家庭
第4回	ホームステイなし (※2)
第5回	19家庭
第6回※3)	
第7回	8 家庭
第8回	9 家庭
第9回	14家庭
第10回	12家庭
第11回	10家庭
第12回	7 家庭
第13回	ホームステイなし (※2)
第14回	11家庭
第15回	10家庭
第16回	7 家庭
第17回	4 家庭
第18回	6 家庭
第19回	5 家庭
第20回	5 家庭

ホストファミリー所属団体等 (県内国際交流団体等に所属の場合):

仏生山国際交流会
 香川日韓交流協会
 ボーイスカウト香川連盟坂出第4団
 アイバル香川
 香川県国際交流協会
 高松市日中友好協会
 日本語「まんのう」
 香川大学

- ※1 第1回のみ研修全日程でホームステイ実施。本学学生もホストを担当。
- ※2 週末をはさまない1週間以内の特別プログラムであったため、ホームステイはなし。
- ※3 第6回は、百日咳流行に伴う全学休講のため中止。

3-7. Buddies

	Buddies登録学生数
第15回	18
第16回	13
第17回	14
第18回	7
第19回	13
第20回	8
計	73

※第15回より、研修期間中に研修生との交流や生活サポートを担う本学学生を「Buddies」として各回ごとに事前に募ることとした。

4. ホストファミリーからのメッセージ

本報告書作成にあたり、ホストファミリー3名からご寄稿いただくことができた。

東海様には当プログラム開始初期の頃から、藤田様と内海様には第11回プログラムからお世話になってきた。感謝の意を込めてここに掲載させていただく。

香川大学「日本語科」研修生の為の ホストファミリーになった経緯について

とう かい
東 海 末 子

私達が国際交流の活動の一つで、海外から日本にやってくる留学生のホストファミリーになっていた関係で、香大の「日本語科」の春秋2回、韓国、台湾、中国より日本語の研修にやってくる若者達の為のホストファミリーとなったのは極自然の成り行きであった。元々九州に転勤になった隣接する長男夫妻が大学生の頃、アメリカに留学していた事や住んでいた家が空いていた事が手伝ってこれから世に出て活躍する若い人達に何か良いことがしたいと思ったことがその切っ掛けでした。

今、世界では「ウクライナ」「親ロシア派」「イスラム国」「シリア」など信じる宗教の違いといった事が切っ掛けで人間同士の殺戮が地球上のあっちこちで日常頻繁に行なわれています。本当に大変嘆かわしい事です。

私達が一番最初にホストファミリーになった時の事を思い出しますが、英語も否どこの国の言葉も喋れない、ましてやどこも外国に行ったことのない自分達がホストファミリーの役が務まるのかどうか、といった大きな不安と疑問が正直ありました。しかし持ち前の「当たって砕けろ」先ずは実行の精神で始めた活動が楽しくてそうこうしているうちにもうかれこれ20数年が経とうとしています。その間いろいろ困った事も数多くありましたが、それにも増して楽しかったことが沢山ありました。言葉が喋れなくてもその国の習慣を知らなくても、こちらが誠心誠意努めると以心伝心相手に伝わり、お互いに理解し合えるという事が解ったことは私達夫婦にとってはなによりの収穫でした。ホームステイの若人がそれぞれの国に帰って日本の極一般の平均的家庭に泊まって見聞きした知識、体験が少しでも彼等のこれからの世界平和の原動力のお役にたてればこんなに嬉しいことはありません。また彼等との心通じる会話、体験の中で私達自身教えられたことも数多くあり、研究とはまた別なものでこんなにも親しいコミュニケーションの場に私達も仲間に入れた事を感謝するとともに又機会があればこのような活動に参加したいと思ってます。

こんな祖父母の姿を見てか見ないでか3人いる孫娘も今では海外に興味を持ち、九州のインターナショナルスクールにそれぞれ進学し彼女達のこれからの成長もまた私達の楽しみの一つです。

藤 田 はるよ

香川大学日本語 語学研修が第20回を以て終了しました。その間 長きに渡り各国から沢山の若いエネルギーな学生達が日本の文化・知識を学ぶため短期留学されました。

そして、20回を無事に終えた今、ロン先生を初め諸先生方大学側のご苦勞をお察し申し上げます。

私方は、第11回からホームステイをさせて頂きました。学生さんの中にはベジタリアンで My 鍋を持参の R ちゃん。まるで我が家の様にスーパーへ買い物から手料理を振舞ってくれた T さん・・・

思い出せば皆懐かしい、今なお 日本語能力試験一級に合格！！秘書に就職が決まりました。又この度結婚しましたと喜びのメールも・・・。。 これぞホストファミリー冥利に尽きます。

藤田家に沢山の娘（孫）達が台湾に出来ました。彼女たちに会いたい！！ いつの日か再会を楽しみにしている今日この頃です。

その節には、国際グループ研修の一助に微力ながら係わらせて頂いた事に感謝いたします。

本当に有難うございました。

ホストファミリーを経験して

満濃の母 内^{うつみ}海 美貴子

「私、何もしませんから」「はい、それでいいんですよ」ロン先生と交わすお約束の言葉で始まるホームステイですが、我が家に来た留学生の方々にはほんとに申し訳ない。食べ物は凝ったものではなく、行くところは必ず、車で五分の満濃池。時には家族のいざこざに巻き込まれ(?) 挙句の果てに 足の骨折、何もできないまま帰国。もう踏んだり蹴ったりですよ。でも、4年たって彼女から届いた手紙にはさすがに涙が…。

折に触れ便りをくれる留学生もいて、「なんやねん（なぜか大阪弁）帰っても何の連絡もないんかいな」とぼやいている私は、反省することも。何かと気を使い、結構大変なホストファミリーですが、なければならぬ、なんだか寂しいような。

いつでもオッケーです。また声をかけて下さいませ。満濃から迎えに行きますから。帰りはもちろん、満濃池経由で。

5. 元研修生からのメッセージ

香川大学短期プログラムの関係各位へ

チョウ テイ
張 婷

(台湾 輔仁大学：第14回プログラムに参加)

【先生たちへ】

2月に日本の学校の授業まだ終わらないのに、留学生の為に、短期プログラムの為にいろいろな用意したり、寮を手配することなどに本当に感謝しております！

また、栗林公園に行って茶道を見学したり、日本の大学生と一緒に茶道を体験することもあれらのシーンは今までも記憶に残っています。

あいにく、ケガをして帰国事態になって、本当に申し訳ございません。

短いですが、いろいろお世話になりました!!!!

【ホームステイ先の皆様へ】

元々週末にちゃんと日本人の家族と一緒にいい日を過ごすつもりですが、

結局、ケガをしてびっくりさせて週末なのに、わざわざ病院に行って本当に申し訳ございません。

お父さんは作った料理がすごく美味しかった。

お母さんは私がプディングが好きっていうことを聞いて笑った姿、今までずっと記憶の中に残っています。

長男は台湾と中国の間の歴史にまだ興味がありますか？

次男はその時すごく物静かで…あまりしゃべらなかつた本当に残念です。

三男…一緒にサッカーをやっていい思い出を作るのにQAQ… 驚かせてすみません。

【結末】

今、振り返ってみれば、「もしあの時私は骨折しなかったら、今の私はどうなりますでしょうか？」と時には私は考えます。

短期プログラムと言っても、約2週間くらいあります。

イ ウン ジ
李 恩 知

(韓国 漢陽大学：第18回プログラムに参加)

何から始めるのがいいのかが少し悩みですが、

短かった時間でしたが、香川大学で生活しながら感じた感想を書いてみます。

まず、プログラムの全般的な内容がとても楽しくて良かったです。

専攻が日本語文化学ですので、日本文化について体験できたのがすごく良かったです。

茶道は一度やってみたいと考えてきましたので、プログラムの一部だと聞いたとき、ついドキド

キってしまったこともありました。

特に、栗林公園がとても印象的でした。

留学の前にクラブ活動で日本の公園について調査し、発表したことがあります。

そのとき栗林公園のことを知ることができて一度見たかったです。

スタッフたちと過ごした時間もとても大事な思い出です。

一緒にお好み焼きを作ってみたり、カラオケに行ったり、そして大学の回りにあったうどんのお店で一緒に食べたそのうどんの味は忘れられません。

ホームステイのおじさんとおばさんも忘れられません。

愛媛県にある道後温泉に連れて行ってくださいましたけれども、個人的に温泉が大好きで、すごく楽しくて嬉しかったです。

一番印象的だったのは香川県の自転車のことでした。

私が住んでいる町は高台であまりにも自由に自転車に乗れないですので、留学中思い切り乗れました。

風景や雰囲気もとても長閑で、留學生活を楽しめることができました。



香川大学研修の感想文

シュ カ エイ
朱 家 瑩

(台湾 輔仁大学：第18回プログラムに参加)

みんな、お久しぶりです。私は、朱家瑩と申します。研修が終わってから、常にFACEBOOKとEメールを通じて、韓国の友達やBUDDIESたちやホストファミリーと連絡しています。二週間だけで、みんなが仲良くなりました。そういうことが不思議だと思います。本当に縁があることですよ。

大学を卒業してから、日本へワーキングホリデーに行きました。その間、豊かな経験を積んで、なかなか充実した生活をしました。例えば、香川県へも一回行って、ホストファミリーのお宅に泊まりました。内海さんのおかげで、よい思い出をつくりました。本当に感謝の気持ちをこめて、また会えたら、いいなあと思います。ワーキングホリデーが終わってから、台湾に帰って、うちの会社で働いています。疲れたとき、いつも日本にいたことを思い出します。特に、香川へ研修に行ったこ

とです。知り合った人も習ったことも、今も忘れないほど、心においでいます。

私は、「一期一会」という意味を信じています。だから、毎回人々に会ったとき、お互いの縁を必ず大切にしようと思っています。「ありがとう」という言葉だけで、感謝の気持ちを全部に伝えることができません。そのために、いつか会えることを期待しています。みんな、またね！ ^^

~~~~~  
パク セギョ  
朴 世 溪

(韓国 建国大学：第18回プログラムに参加)

2013年1月から1ヵ月間、香川大学で語学研修 Program で学ばせて頂きましたパクセギョです。まだ忘れることができない良い思い出について発言の場を頂きありがとうございます。香川大学の研修プログラムが良かったのにはいくつかの理由があります。

一つ、少ない学生数にもかかわらず様々な教授たちと Staff の皆様に御指導して頂き、大学生だった私がまるで小学生の時に戻って『幼い日の師の恩』を感じる事ができました。

二つ、Buddies らが本当に親切でした。

海外の様々な大学を経験してきましたが、香川大学の Buddies が1番親切で、良い友達になれました。

三つ、香川大学の諸サークルと合同で進められる Program が良かったです。

この点は他の大学の研修 Program からも学ぶべき点だと思いました。

帰国後の今でも時々、香川地域のうどんを思い出します。

研修が終わり韓国へ帰国すると、香川地域で有名うどん店が韓国にも開店していました。

そこでうどんを食べる度に香川地域のおいしいうどんを思い出します。

又、私はホームステイ先の事を忘れる事はありません。

短い時間でしたが、人の温もり溢れる素敵な家庭を拝見させて頂きました。

いつか私も彼等のような心に余裕のある暮らしを。と思いました。

最後に、彼等に手紙をマメに書くべきでしたが、忙しい生活のため忘れていました。

再び彼等に手紙を送ります。

香川大学の繁栄を祈願します。

~~~~~  
ヨウ クン
葉 健 君

(台湾 輔仁大学：第18回プログラムに参加)

台湾-葉健君です。

二年前に、香川大学の日本語語学研修プログラムのことを知りました、その時の私、香川に行く

かどうか、ずっと考えていましたが、母と相談したあとで、行くことにしました。

二週間の中で、たくさん日本語を習って、いろいろな日本文化も学習しました。

そして、香川大学の先生たちから、Buddies、ホームステイのファミリーたちまで、たくさん助けてもらいました。今まで、心の中で感謝の気持ちを忘れず、大切な思い出だと思います。

私にとって、この研修のおかげで、日本語の学習をもっと好きになりました。



リュウ 劉 ルイ ジュン 芮 君

(台湾 輔仁大学：第18回プログラムに参加)

二年前、香川大学で研修のことを心の中で思い続けていて忘れられなくて、卒業する前に、もう一度香川に行きたいですから、今年一月、冬休みの始めに香川県に行きました。私は同じ第18回研修プログラムの葉さんと張さんと一緒に高松に遊びに行きました！到着しました時、やっと高松へ帰って、とても嬉しかったです。私たちは香川大学の buddies と一緒に晩御飯を食べながら、おしゃべりしました。以前とあまり変わらず buddies も皆親切です。みんなも一緒にカラオケに行って、楽しかった。また、私たちも第18回のホームステイのお母さんと会って、一緒に御飯を食べます。

三日間の時間、香川県で遊んで、そして、京都に行きました。私たちも京都で第18回研修プログラムの韓国の友達と会った！実は一年前、私と張さん一緒に韓国に行きました。その時、私たちは同じ第18回の韓国友達の三人と会って、ソウルで美味しい料理を食べて、ソウルタワーに観光に行きました。そして、そのあとの半年後、韓国友達も台湾に来て遊びました。たまに、私はハガキを書いて、ホームステイの母さんに送ります。



香川での再会 (2015)



台湾での再会 (2014)

私たちは違う国で住んでいますから、いつも会えることはできません。でも、研修のこともう二年過ぎて、卒業する前に、みんなともう一度会えて、本当によかった。今は四年生ですから、今年の6月、私たちは学校を卒業します。私は日本でワーキング・ホリデーをしたいです。一年間の時間を利用して、日本のあっちこっちに行きたいです。

香川大学の研修プログラムを通じて色々な日本のことを勉強しました。日本人学生そしてほかの

国からの研修生の友達も何人もできました。香川大学で過ごしたことが私には本当にうれしくて美しい思い出です。本当に皆と出会えて良かったと思いました。また香川県に行きたいです！



韓国での再会 1 (2013)



韓国での再会 2 (2013)

呉 姿 涵

(台湾 輔仁大学：第19回プログラムに参加)

わたしはごしかんと申します。2013年の夏休みは「香川大学 日本語語学研修プログラム」に参加しました。

わたしは今もホストファミリーと他の研修生と香川大学の学生さんと連絡しています。メールで、FBで、手紙で、皆さんと連絡しています。

ホストファミリーは優しいですから、いつもプレゼントをくれます。

この研修に参加したので、日本のこともっと知りたいと思います。チャンスがあれば、もう一度香川大学へ行きたいです。

日本語が甘くないですが、研修プログラムに参加できたので、たくさんの人と友達になりました。香川の名所へ行けました。いろいろな思い出を作りました。

本当にありがとうございました。





ジョン
鄭 ナレ

(韓国 清州大学：第20回プログラムに参加)

日本語を専攻している私にとって香川大学の研修プログラムは、日本の大学生活を直接経験できるいい機会でした。日本語を学んでいる外国の学生たちに日本の文化を实际体験できる機会はあまり多くないからです。2週間の短い日程だったが、色々なことを考えたり、学んだりして本当によかったです。そして国籍や文化の違いとは関係なく、私達はいつでも気の合う友になれるということも感じられました。今私は日本にきていますが、去年香川で身につけたことを基にして頑張っています。香川大学で出会った友たちとホストファミリーとは今も仲よくしていて、特に人間関係について気になることがあったらラインとかで連絡やりとりしています。私は4年生なのでこういう研修プログラムはもう参加できないけど、卒業したら専攻を生かして職を選びたいと思っています。



6. Buddies からのメッセージ

日本語語学研修プログラム

教育学部4年 竹崎 千 祥^{ち さち}
(2015年3月卒業)

日本語語学研修プログラムに何度もバディーズとして参加させていただく中で、多くの思い出と、様々な文化体験ができました。日本で生まれ育っていると当然のことも、研修生には目新しく、研修生の疑問に対して答えに窮したこともありましたが、自分の視野を広げる助けとなる良い経験となったと思います。



教育学部4年 松嶋 佳 加^{よし か}
(2015年3月卒業)

私はバディーズに参加することで韓国と台湾にたくさんの友人を作ることができました。その友人たちとは今でも交流が続いており、このプログラムに参加してよかったと思っています。また、バディーズをすることで今まで知らなかった香川の観光地や魅力を発見することができ、私自身とてもいい体験になりました。

7. 写真で振り返る各回の取り組み

第11回



第12回



第13回



第14回



第15回



第16回



第17回



第18回



第19回



第20回



8. 終わりに

平成17（2005）年度より開始した「日本語語学研修プログラム」は平成26（2014）年度夏の第20回をもって一旦終了した。ちょうど10年間である。この間、実に多くの皆様から温かなご支援を賜った。本来ならば、本プログラム終了決定後すぐ、お一人お一人へご報告とお礼を申し上げるべきであったが、本報告書の発行をもってご報告とさせていただきます。

本プログラム開始当初は、大学の国際化の一つの指標として外国人留学生の受入が声高に言われていた。本学も、この日本語語学研修プログラムを外国人留学生受入のための呼び水の一施策と位置づけ、海外、特に、日本語学習熱の高い近隣アジアの協定校を中心に、広く研修生を受け入れて来た。一方、この10年の間に、本学のみならず、日本の大学界全体を取り巻く環境は大きく変化した。大学に求められる教育も少しずつ、しかし大きく変化してきている。私たちが本プログラムを一旦終了し、新たな段階へと踏み出すのも、大学に求められる教育に応えようとしてのことである。

しかしながら、日本語の学習や研修そのものの重要性が低くなるわけでは決してなく、本学における日本語、日本文化教育重視の姿勢が変わるわけでも決してない。より多くの外国人留学生を受け入れ、彼らにより充実した学習環境を提供するためには何が必要なのかを改めて考えてみようということである。

私個人の感想となって甚だ恐縮だが、私が本学へ赴任してきた平成20（2008）年春、海外の大学で日本語、日本文化を専攻する外国人、しかも、とても流暢な日本語を使う若い外国人の姿に大変驚いたのを覚えている。「なぜ彼らは日本語を学び、日本文化へ関心を持つのだろうか」という疑問と関心を抱きながら、本プログラム研修生へ講義をしたり実習へ同行したりした。そして、彼らが日本語を学ぶ理由や「日本文化のどこに関心を持っているのか」等が次第に理解できるようになった。今後も彼らのような多くの外国人と出逢えることを心待ちにしている。

最後に、本プログラムの実施にご協力くださったホストファミリーの皆様、実習等を快く引き受けてくださった県内企業やその他施設の皆様、交流会等で研修生に対する温かな励ましの言葉をくださったその他多くの方々、本当にお世話になりました。有難うございます。

今後ともよろしく願いいたします。

香川大学インターナショナルオフィス 正 楽 藍

編集後記

第20回をもって終了となった本プログラムの報告書第二弾が発行の運びとなった。4年前に第1回から第10回までの報告書を作成したのが、つい先日のような気も、また、ずいぶん前のような気もしている。

この10年間、プログラムの回を重ねるごとに情報通信分野も発展を遂げてきた。以前は、プログラム開始時に初めて関係者同士が顔を合わせ、修了式では涙なみだの別れだったものが、近年では、事前にメールやFacebook等で連絡を取り合って面識ができ、笑顔でプログラムを終了し、その後も交流が継続・発展していくケースが増えてきた。後日日本で、母国で、また友人の国で再会を果たしたという話を耳にすると大変嬉しく（私自身も実際に数人と再会できた）、世界は狭く近くなったのだろうかとも思う。そして、そのようなつながりのおかげか、今回、日本・台湾・韓国ともに年度の変わり目の多忙な時期にも関わらず、寄稿の依頼に関係各位が喜んで応じてくれ、本当に心から感謝するのみである。

日本、願わくは本学への再留学のための呼び水を意図して開始した本プログラムでは、呼び水が奏功し本学へ再度留学してきてくれたのは1名（台湾より交換留学生として）であったが、日本の他大学への留学、日本以外への国への留学、ワーキングホリデーでの再来日、日本での就職など、さまざまな形で元研修生たちが国際的に活躍してくれている。多少なりとも本プログラムがプラスに作用したと信じ、留学生受け入れ増へ向けて、また新たな気持ちで次の一步を踏み出したい。（塩井 実香）

香川大学インターナショナルオフィス留学生センター

日本語語学研修プログラム報告書編集委員会 一同

ロン・リム（副オフィス長、留学生センター長、教授）

高水 徹（講師）

塩井 実香（講師、編集委員長）

正 楽 藍（講師）

香川大学留学生センター 日本語語学研修プログラム
報告書（第11回～第20回）

印刷・発行 2015年3月31日

編集者

〒760-8521 高松市幸町1-1

香川大学インターナショナルオフィス留学生センター

日本語語学研修プログラム報告書編集委員会

FAX 087(832)1155

印刷所 牟禮印刷株式会社

